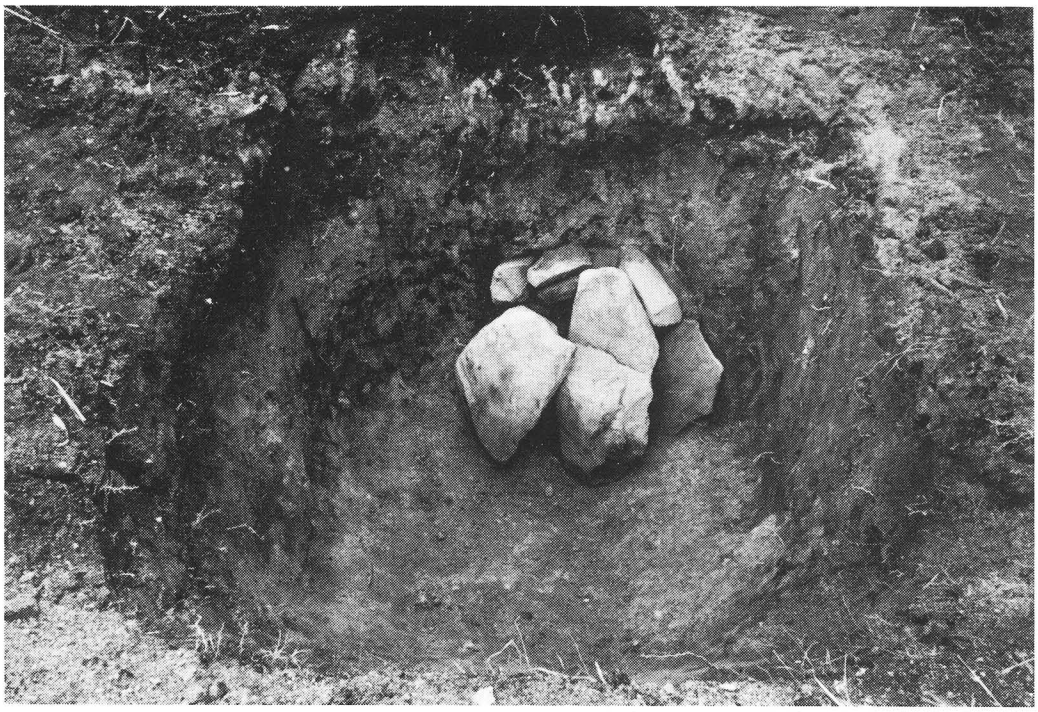
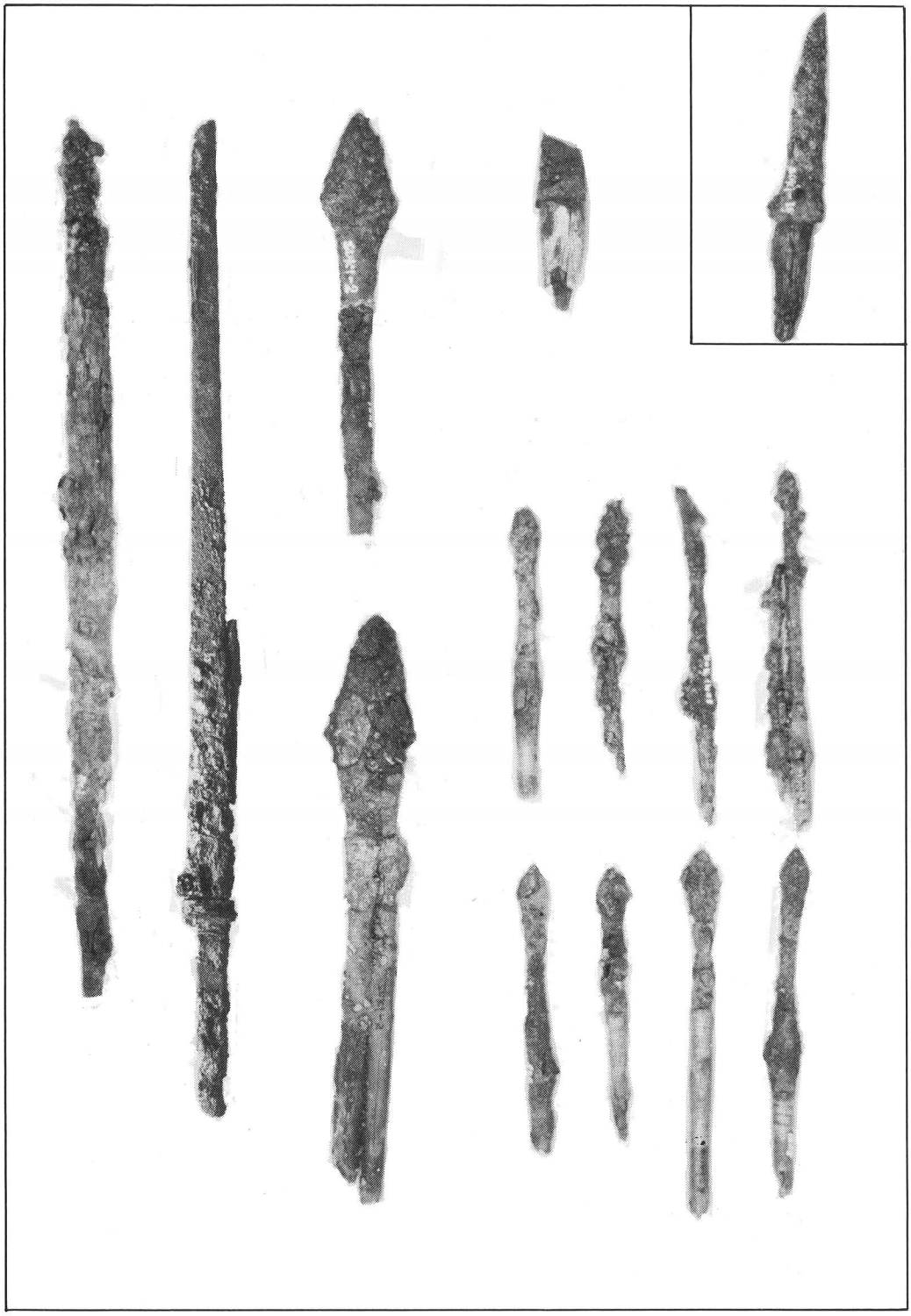
図版22　第10号地下式古墳



(1)　竪　　坑　　部

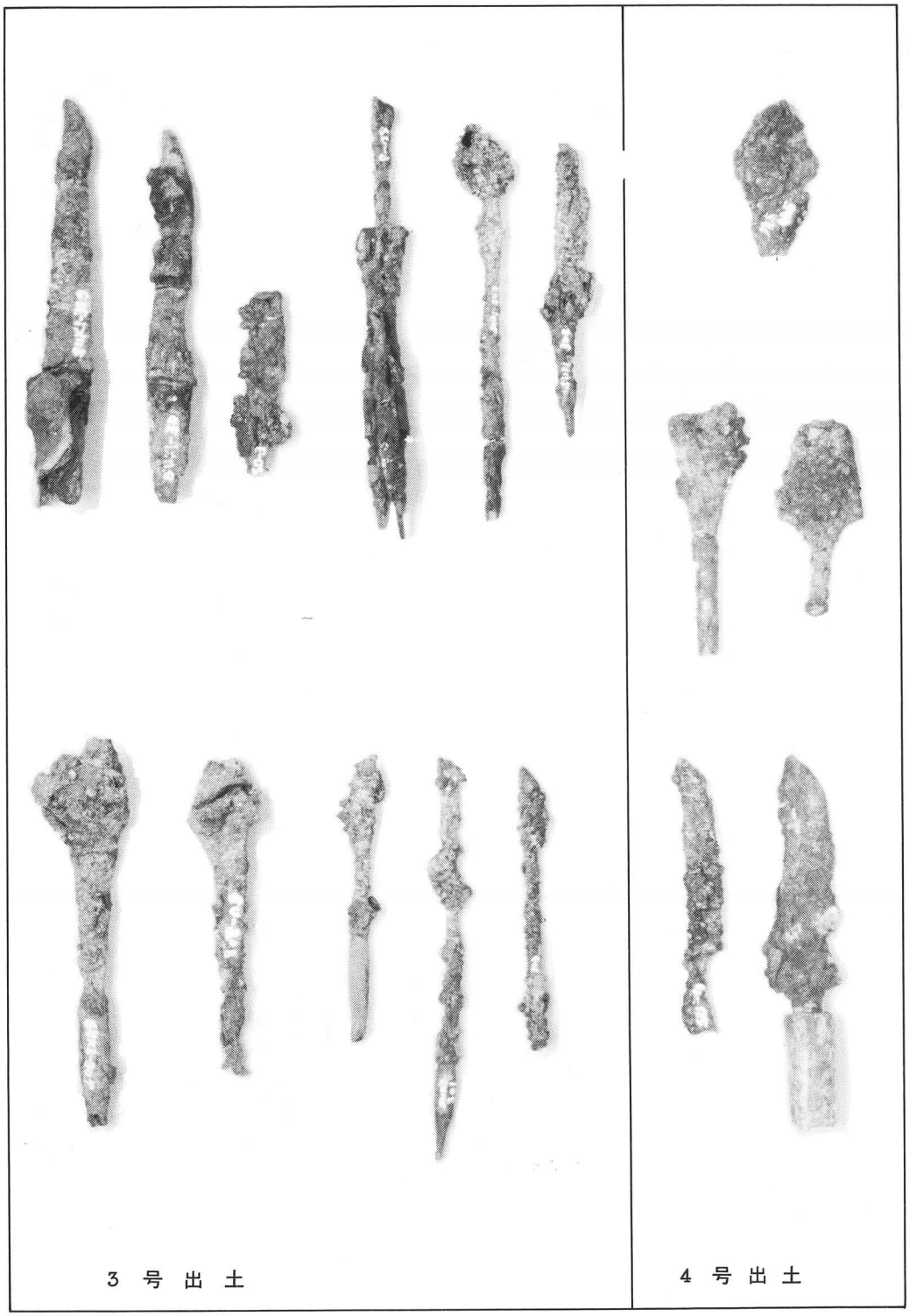
(2)　閉　　塞　　石

図版23　1～2号出土遺物



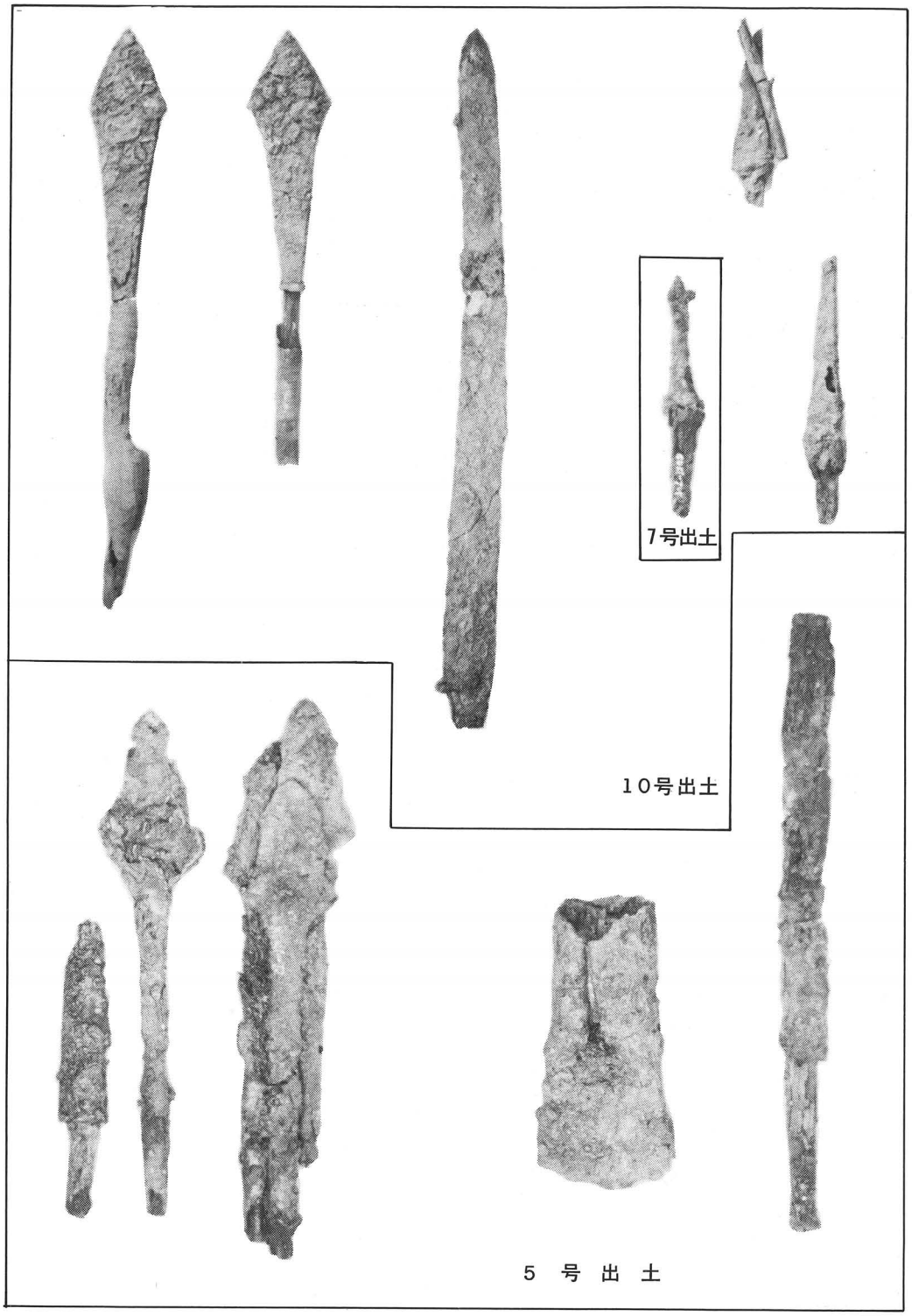
右上刀子　1号地下式古墳出土
他は2号地下式古墳出土

図版24　3・4号出土遺物



3　号　出　土　　4　号　出　土

図版25　5・7・10号出土遺物



日守地下式古墳群発掘調査（５５－１～４号）

西諸県郡高原町大字後川内１－118，302番地

県文化課主任主事　岩　永　哲　夫

県文化課主事　北　郷　泰　道

本　文　目　次

Ⅰ　所　在　地 ……（岩永）…… 157

Ⅱ　調査の経緯 ……（〃）…… 158

Ⅲ　調査の結果 ……（北郷）…… 158

1.　55－1号 ……（岩永）…… 159

2.　55－2号 ……（北郷）…… 161

3.　55－3号 ……（岩永）…… 166

4.　55－4号 ……（北郷）…… 168

5.　日守地下式古墳出土の人骨 ……（松下孝幸）…… 169

6.　日守地下式古墳出土の幼児骨 ……（分部哲秋）…… 179

Ⅳ　結　　語 ……（北郷）…… 185

挿　図　目　次

第1図　遺跡所在地図 …… 157

第2図　日守地下式古墳55－1号～4号配置図 …… 159

第3図　55－1号地下式古墳実測図 …… 160

第4図　55－1号地下式古墳出土副葬品実測図 …… 161

第5図　55－1号地下式古墳出土貝輪実測図 …… 161

第6図　55－2号地下式古墳実測図 …… 162

第7図　55－2号地下式古墳出土副葬品実測図 …… 164

第8図　貝輪出土状態実測図 …… 166

第9図　55－2号地下式古墳出土貝輪実測図 …… 166

第１０図　55－3号地下式古墳実測図 …… 167
第１１図　55－3号地下式古墳出土刀子実測図 …… 167
第１２図　55－5号地下式古墳実測図 …… 168

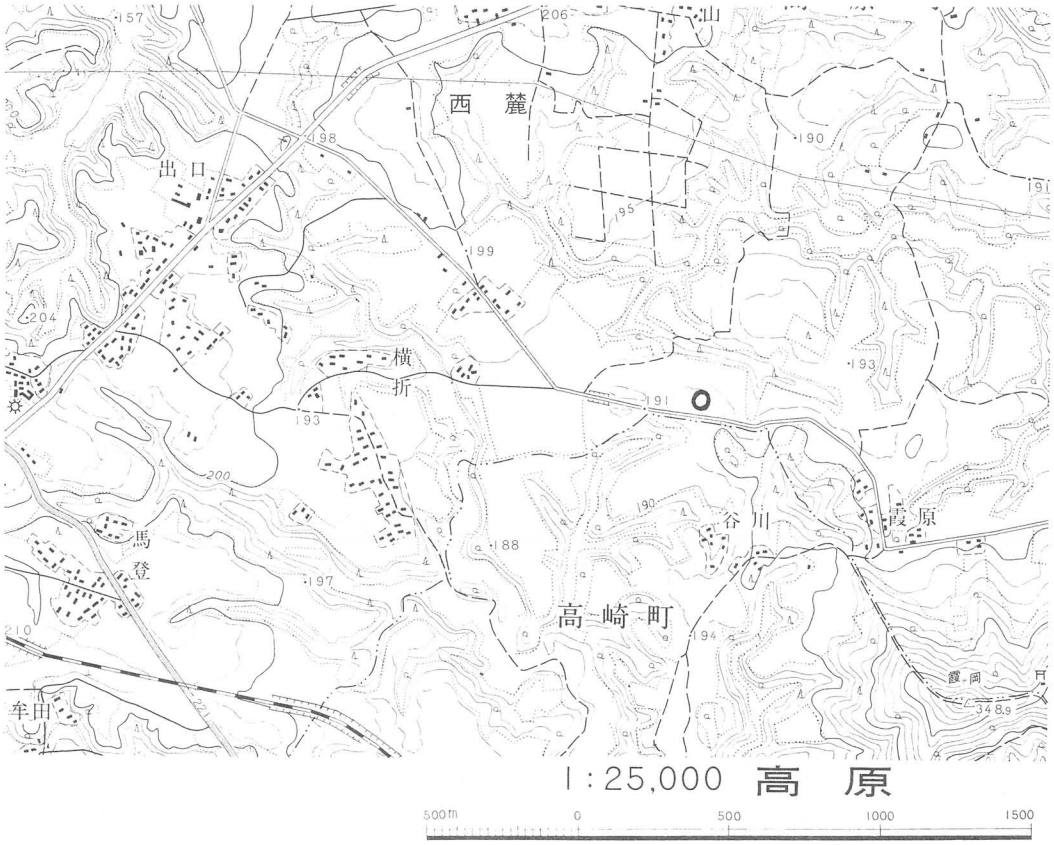
図　版　目　次

図版１　日守地下式古墳５５－２号南壁彩色線文 …… 187
図版２　(1)　遺跡遠景 …… 187
　　(2)　１号地下式古墳玄室状況 …… 188
図版３　(1)　人骨状況 …… 189
　　(2)　２号人骨 …… 189
図版４　(1)　天井の状態 …… 190
　　(2)　遺物状況 …… 190
図版５　(1)　玄室内全景 …… 191
　　(2)　貝輪の状態 …… 191
図版６　(1)　３号地下式古墳 …… 192
　　(2)　４号地下式古墳 …… 192
図版７　２号地下式古墳出土副葬品 …… 193
図版８　１号地下式古墳出土副葬品ほか …… 194

Ⅰ　所在地（第１図）

日守地下式古墳群は，高原町と高崎町との町境に所在し，標高１９０ｍ台の台地上に位置している。南に道路一つ隔てた高崎町仮屋尾でも過去地下式古墳が発見されており，町名こそ違え，日守地下式古墳群と一群を成すものと思われる。

西諸県郡高原町大字後川内１－１１８，１－３０２番地（土地所有者西諸県郡高原町大字西麓２６０２番地，太鼓　稔氏）



第１図　遺跡所在地図（○印）

Ⅱ　調査の経緯

小林地区農業協同組合高原支所が育苗事業に必要な土砂を，土地所有者太鼓　稔氏から譲り受け，業者に委託し，昭和５５年５月１０日から採土作業を開始した。５月３１日，パワーショベルにより切土法面仕上げ作業をしていたところ，４基の地下式古墳が発見され，今回の調査に至ったものである。この日守地下式古墳群は，昭和５４年に同じ事業により４基が発見され，県教育委員会を調査主体者として同年５月８，９日に５４－１，２号，６月７～９日に５４－３，４号を発掘調査し，第２２集において報告したところである。

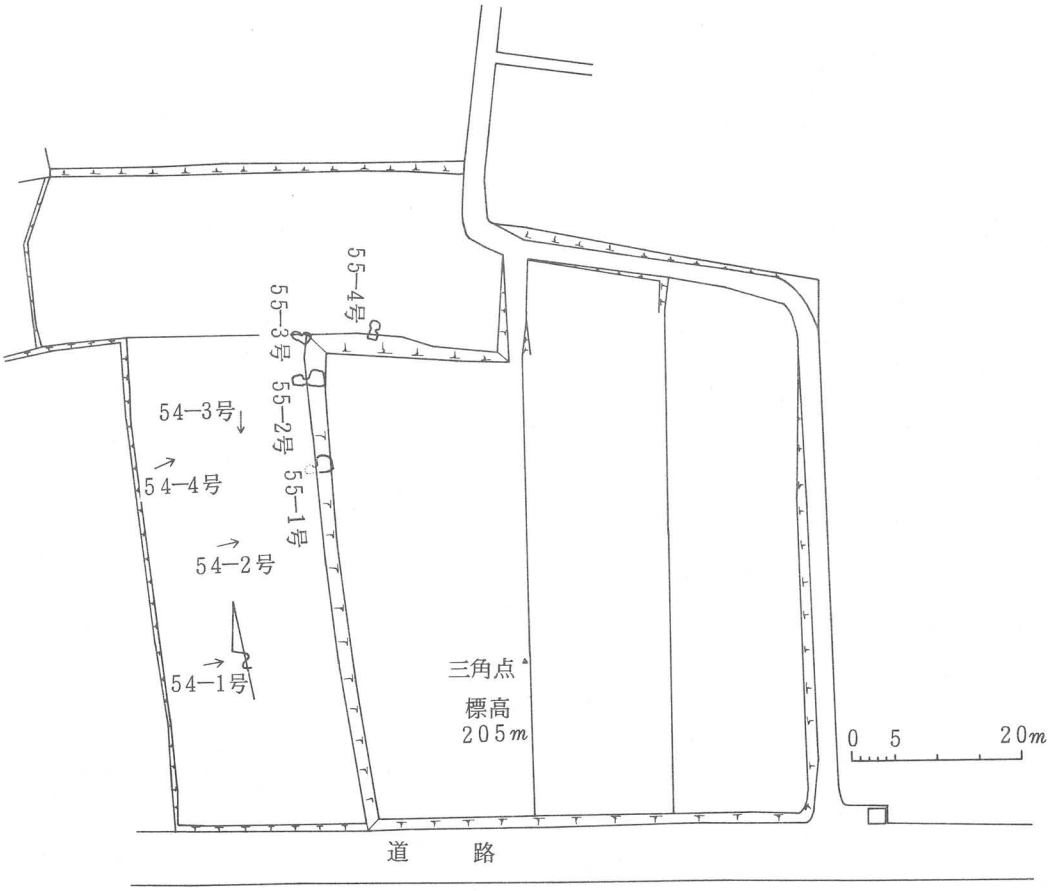
今回の調査は，高原町教育委員会が調査主体者となり，昭和５５年７月７日から１２日までの６日間実施した。調査は，県教育庁文化課岩永哲夫，北郷泰道が担当した。人骨については長崎大学医学部助手松下孝幸，分部哲秋先生に玉稿をいただいた。記して感謝申し上げる。

Ⅲ　調査の結果（第２図）

今回発見された４基の地下式古墳は，５４年の調査地の東北部に位置している。切土法面添いに出土しており，南から５５－１号～３号とし，やや東側で発見されたものを５５－４号とした。

同地は，東から２枚目と３枚目の畑地の境にある三角点をほぼ中心とし，なだらかな丘陵地をなしており，おおむね地下式古墳は，５４年調査の４基も含め丘陵地の中心に向かい構築されている。５４－１号，２号，４号，５５－１号～３号は，ほぼ主軸を東西とし，５４－３号，５５－４号は，ほぼ主軸を南北としており，丘陵地という地形的条件の規制を幾分かは受けながらも，群を構成するという意図がうかがわれる。

５５－２号は，５５－１号から北へ約１０ｍ，５５－３号は，５５－２号から北へ約４ｍ，５５－４号は，５５－３号から東へ約８ｍの距離に位置している。



第2図　日守地下式古墳55−1号〜4号配置図（矢印は54年調査分の位置と玄室の方向を示す）

1.　55−1号（第3図）

この地下式古墳は，竪坑のほとんど，玄室の一部が破壊されて発見された。

竪坑部の形状は不明であるが，削平された畑地に大きな自然石が落ちていたことから，羨門閉塞していたことが推察される。

羨道も半壊状態であるが，床・天井の一部が残っており，玄門での幅70cm，天井の高さ56cmを測る。

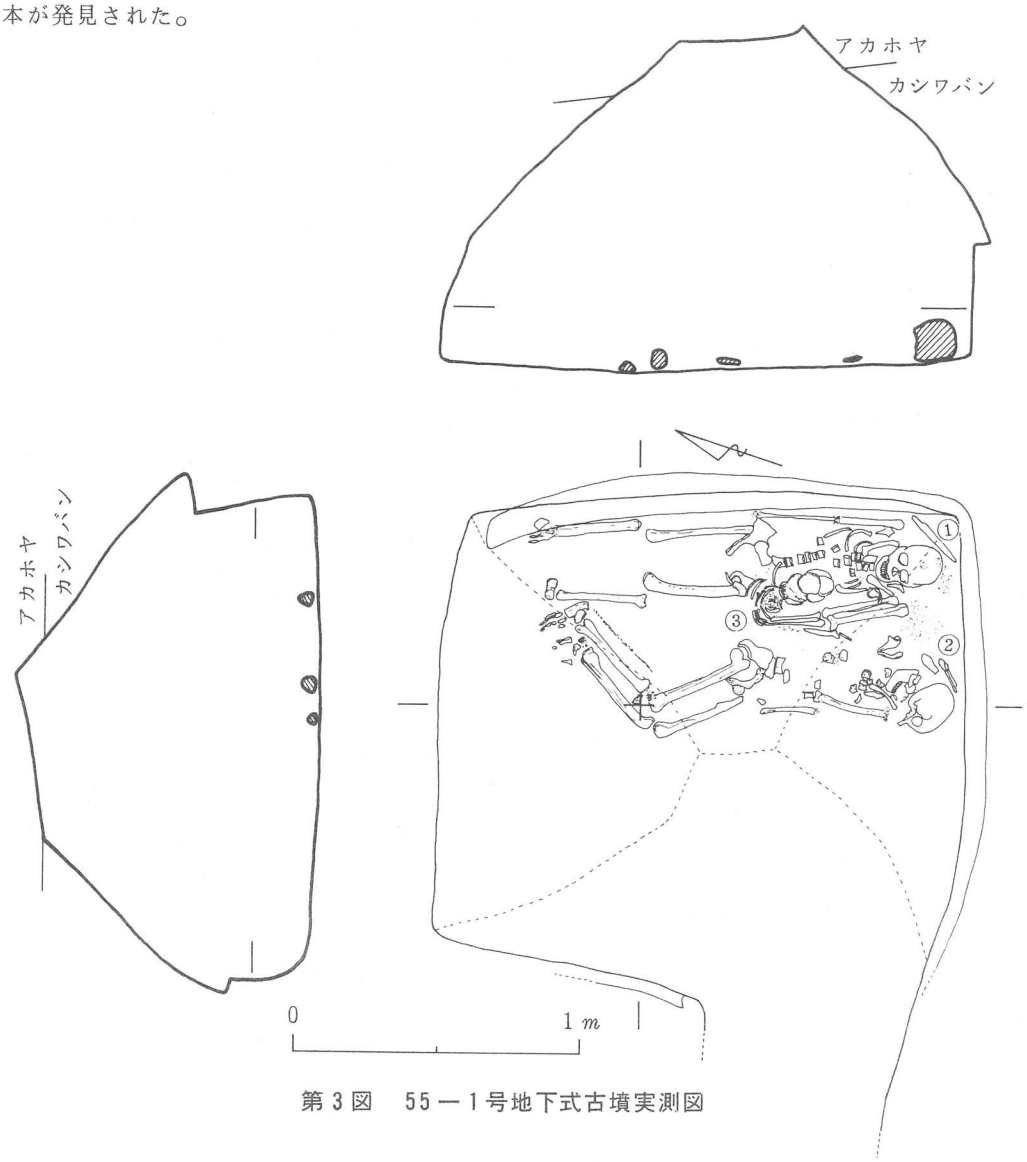
玄室は，天井上部がアカホヤ層に達しているが，主体のほとんどはカシワバンに掘り込んで構築されている。主軸方位はN72°Eである。構造は，左片袖の平入り寄棟造りであり，床面では長さ170cm，幅185cmの方形状をなす。右・奥・前壁に棚状施設を有し，右壁で床から40cmの位置に最大7cmの幅を，奥壁で同じく40cmの位置に最大15cm幅，前壁

で２５cmの位置に４cm幅を有している。

玄室築造の調整痕は，棚下部分では縦に，左壁においても縦に削っているのが観察でき，調整工具は方頭の幅９cmのものである。

被葬者は３体を数え，頭を右（南東）に向けて葬られていた。手前の１号人骨は膝立て葬，奥の２号人骨は伸展葬であり，２号人骨の左腹部には小児骨が埋葬されていた。２号人骨の頭部は施朱され，周辺にも朱の散乱があった。

副葬品としては，２号人骨頭部に剣１振，左手首に４個の貝輪，１号人骨の頭部に鉄鏃２本が発見された。



第３図　55－１号地下式古墳実測図

遺　物（第４・５図）

剣（第４図１）

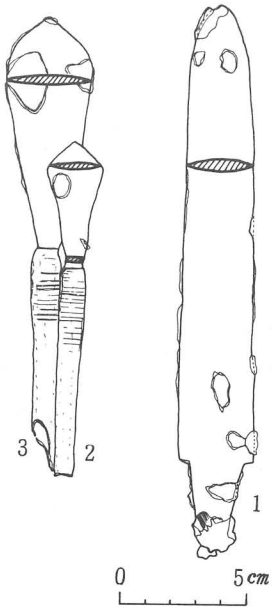
短剣で，現存長２１.８cm，剣身長１８.０cm，身幅は中央で2.８cm，厚さは0.５cmを測る。

鉄　鏃（第４図２・３）

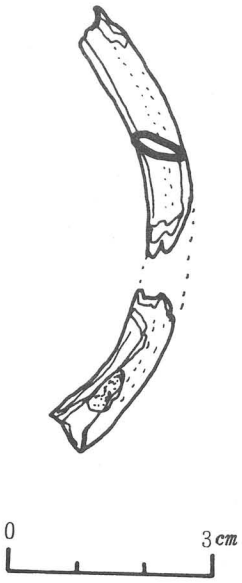
銹着状態にあるが，ともに変形圭頭斧箭式である。２は小型鏃で現存長１３.１cm，鏃身5.０cm，最大幅2.２cm，厚さ0.２cmを測る。矢柄は良好な状態で残っている。３は大型で現存長１７.８cm，鏃身9.０cm，最大幅3.３cm，厚さは0.３cmである。矢柄は比較的良く残っている。

貝　輪（第５図）

調査では４個が確認できたが，風化が著しく進んでおり，うち１個のみ計測できた。二枚貝製のもので，幅0.６cm，厚さ0.３cmのものである。



第４図　５５－１号地下式古墳出土副葬品実測図（短剣・鉄鏃）



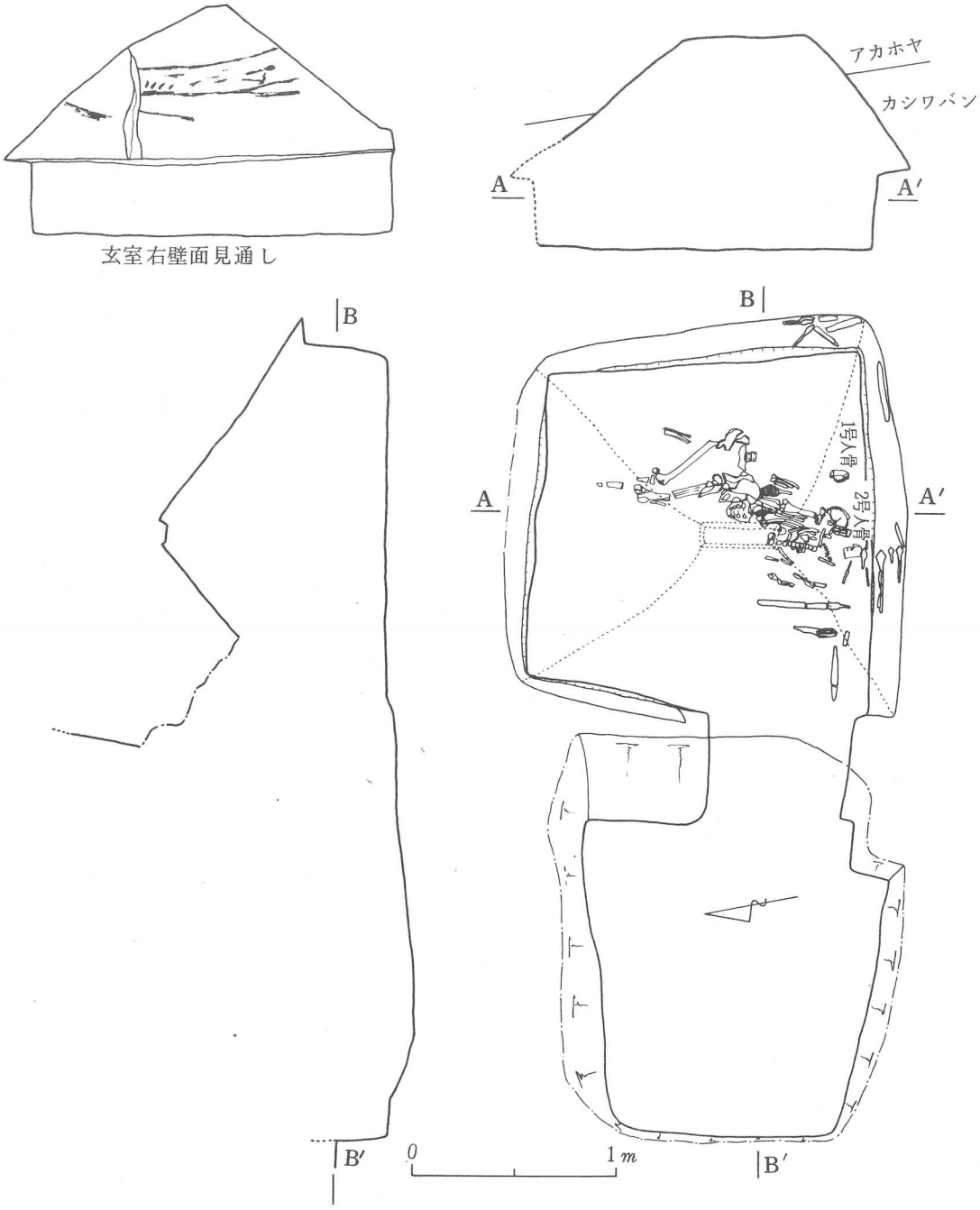
第５図　５５－１号出土貝輪実測図

2.　５５－２号（第６図）

この地下式古墳は，竪壙部の大半が重機により破壊され，玄室天井部の一部が剝落していたが，幸いにして玄室構造の全体像はとどめていた。

竪壙部の平面プランは，梯形に近く，長軸約１m５０cm，最小幅約１mである。竪壙南壁は，羨門に至るまで２つの段が設けられている。

玄室は，天井部のほぼ半分を第１オレンジ（アカホヤ）層とし，以下はカシワバンに掘り込んで構築されている。主軸はN７８° Wを示し，竪壙を西，玄室を東とする。構造は，左片袖の羨門板石閉塞・平入り寄棟造りで，天井部には幅約１３cmの棟木を造り出し，棚状施設を四周にもつものである。玄室の規模は，床面で，棟木に平行の幅１６３cm，棟木に直行の幅１７５cmを測る。また，天井の高さ１０９cm，奥壁での棚状施設の高さ４１cmである。棚状施設上には多くの鉄器類が副葬されていたが，その幅は，最大幅で１６cm，最小幅で６



第6図　55－2号地下式古墳実測図

cmを測る。被葬者は，2体である。

本地下式古墳では，羨道，羨門，及び北壁，南壁，奥壁に塗朱が認められている。羨道，羨門は全面塗朱，北壁，奥壁も全面塗朱に近いが，その範囲はアカホヤ下のカシワバンの壁面に限られている。注目されるのは，南壁の塗朱の状態で，近年地下式古墳で発見例の増えている彩色線文とみることが出来る。また，どのような役割を果したものであるのか不明であるが，床面及び壁面にシラスと思われる白色土が散布あるいは塗られていた。一部，その白色土の塗られた上が塗朱されており，塗朱以前に白色土が塗られたものと思われる。

副葬品としては，今回調査対象の地下式古墳中最も多くの鉄器類及び貝製品が副葬されていた。奥壁の棚状施設上には，剣，鉋，鉄鏃，鍬先等が置かれ，南壁の棚状施設上にも，剣，刀子，鉄鏃等が置かれていた。床面に副葬時から置かれていたと思われるのは，玄室入口部寄りの2振の剣とその間にある鉄鏃で，他は破壊時の衝撃で棚状施設から落下したものと思われる。

遺　物（第7図）

鉄　鏃（第7図1～15）

1は，現存長32.5cm，最大幅5.8cm，鏃身中央部での厚さ0.6cm，鏃身長16.5cmを測り，矢柄部をきわめて良好に残している。変形圭頭斧箭式である。南壁棚状施設上に，鏃先を奥壁に向け副葬されていた。

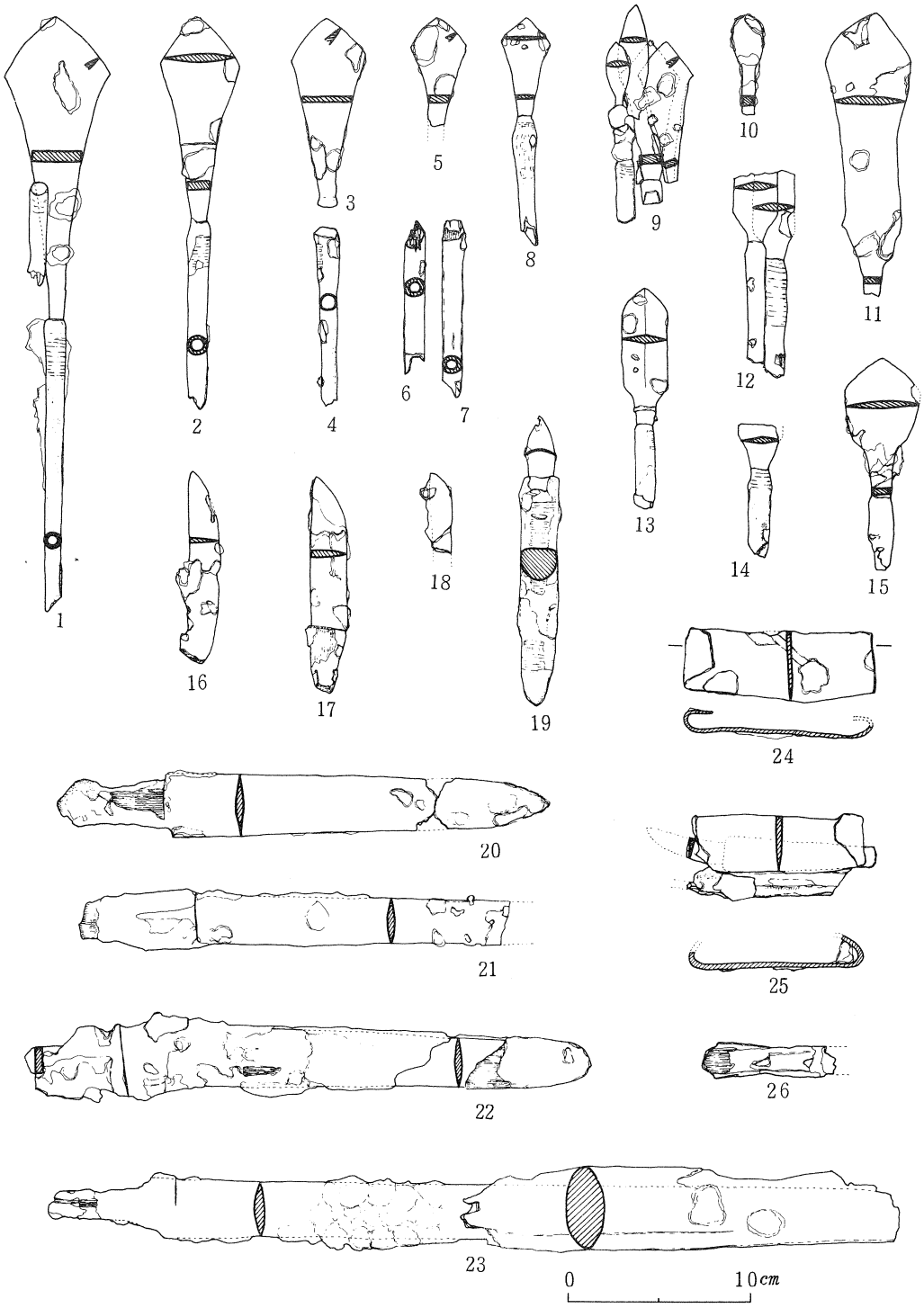
2は，現存長21.5cm，最大幅4.3cm，最大幅部での厚さ0.5cm，鏃身長11.2cmを測る。本来は南壁棚状施設上に副葬されていたものと思われるが，床面に落下していた。

3・4は同一個体と思われるが，直接には接合しない。3は，現存長10.3cm，最大幅4.1cm，鏃身中央部での厚さ0.4cmを測る。1と同じく南壁棚状施設上に副葬されていた。

5は，鏃先のみであるが，現存長5.9cm，最大幅3.0cmを測る。3・4と共に出土している。

8は，現存長12.5cm，最大幅2.6cm，最大幅部での厚さ0.2cm，鏃身長5.4cmを測る。2と同じく棚状施設から床面に落下した状態で出土している。

9は，4本の鉄鏃が銹着したもので，斧箭式と柳葉式の各々2本がその内訳である。右から，現存長9.9cm，最大幅1.3cm，最大幅部での厚さ0.3cm，次が現存長9.8cm，最大幅1.7cm，最大幅部での厚さ0.3cm，3本目の斧箭式が現存長9.0cm，最大幅3.3cm，一番左が現存長7.7cmを測る。11の鉄鏃と共に床面に副葬時から置かれていたものと思われる。



第7図　55—2号地下式古墳出土副葬品実測図

１０も９と同じ地点の出土で，現存長5.5㎝，最大幅1.8㎝を測る。

１１も，９・１０と同じ地点の出土で，異形の抑葉式の鉄鏃である。現存長１5.6㎝，最大幅4.6㎝，最大幅部のやや下方での厚さ0.5㎝を測る。

１２～１４は，奥壁棚状施設上に副葬されていたもので，１２は鏃先を欠損し，右が現存長１0.4㎝，最大幅2.4㎝，厚さ0.5㎝，左が現存長１1.4㎝，最大幅2.4㎝を測る。１３は，現存長１2.1㎝，最大幅2.4㎝，厚さ0.5㎝，鏃身長7.5㎝を測り，鎬が通っている。１４は鏃身の半分を欠損し，現存長7.3㎝を測る。

１５は，現存長１1.6㎝，最大幅推定4.1㎝，厚さ0.5㎝，鏃身長7.6㎝を測る圭頭式の鉄鏃である。

刀　子（第７図１６～１８）

１６は，南壁棚状施設上に副葬されていたもので，現存長１0.5㎝，身副1.5㎝，背幅0.3㎝を測る。

１７も同じく南壁棚状施設上に副葬されていたもので，現存長１1.9㎝，身幅1.9㎝，背幅0.4㎝を測る。

１８は鋒のみで，現存長4.4㎝である。

鉈（第７図１９）

現存長１5.9㎝，柄部長１2.5㎝を測り，刃幅1.7㎝，刃厚0.2㎝である。柄部の断面は，楕円形を半分にした形状を示している。奥壁棚状施設上からの出土。

剣（第７図２０～２３・２６）

２０は短剣で，現存長２7.1㎝，剣身２1.1㎝，身幅は中央部で２3.0㎝，厚さ0.5㎝を測る。玄室入口部に最も近い地点で，鋒を西にして出土している。

２１はやや細めの短剣で，現存長２3.6㎝，身幅は中央部で2.4㎝，厚さ0.5㎝を測る。柄部に木質を残している。奥壁棚状施設上からの出土。

２２は，現存長３1.1㎝，鋒寄りでの身幅2.6㎝，厚さ0.5㎝，　　の幅1.4㎝，厚さ0.4㎝を測る。南壁棚状施設上の奥壁寄りの副葬されていた。

２３は，玄室入口寄りの床面に副葬されていたもので，現存長４6.6㎝，関寄りでの身幅3.0㎝，厚さ0.6㎝を測り，鞘の木質が比較的よく残っていた。

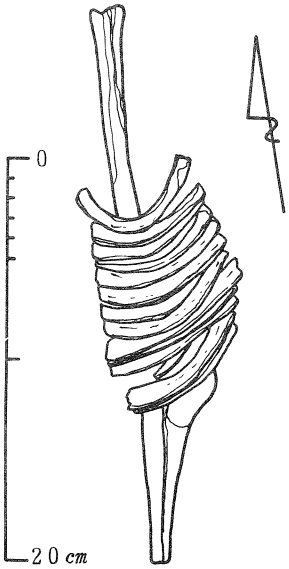
鍬　先（第７図２４・２５）

２４は，奥壁棚状施設上に副葬されていたもので，幅１0.5㎝，長さ3.8㎝，厚さ0.2㎝を測る。両側を折り返したものであるが，片側は欠損している。

２５は，南壁棚状施設から落下したと思われるもので，刀子と鉈を銹着させている。幅9.5㎝，長さ3.0㎝，厚さ0.3㎝を測る。

貝　輪（第８図・第９図）

玄室入口寄りの２号人骨の右前腕骨には，１６個の貝輪が着装された状態で出土した（第８図）。二枚貝製のもので，風化が著しく，半分は欠損している。



第８図　貝輪出土状態実測図

第９図　　５５－２号地下式古墳出土貝輪実測図

3.　５５－３号（第１０図）

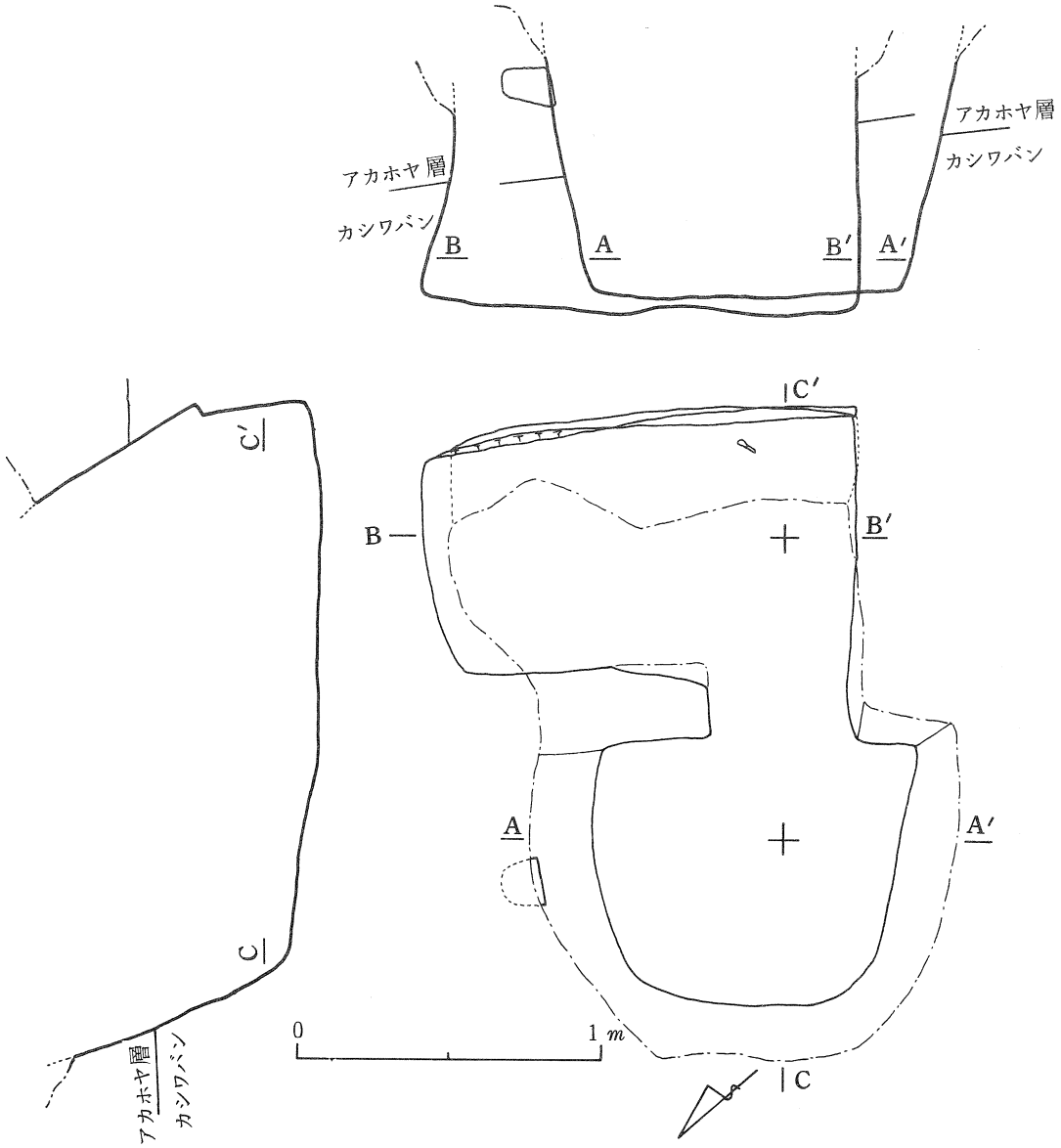
小型の地下式古墳で，遺構の上部が破壊されていた。

遺構は，上半を赤ホヤ層に，下半をカシワバンに掘り込んで構築し，主軸はＮ４９°Ｗである。

竪坑の形態は，隅丸梯形をなし，床面での規模は長さ８８㎝，幅１００㎝である。左側の床面から６０㎝の位置に足掛け様の掘り込みがある。閉塞は，竪坑の掘り込み状態から他と同様，羨門閉塞とみられる。羨道は，長さ２３㎝，幅４５㎝で，高さは不明である。

玄室は，左片袖平入りの切妻形状に近い。奥壁には床面から３５㎝の位置に最大５㎝幅の棚状施設を有する。規模は床面で，長さ７８㎝，幅１４２㎝の大きさである。

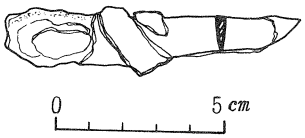
副葬品は玄室奥壁寄りに刀子１本のみ存在し，人骨の遺存はなかった。



第１０図　　５５—３号地下式古墳実測図

遺　物（第１１図）

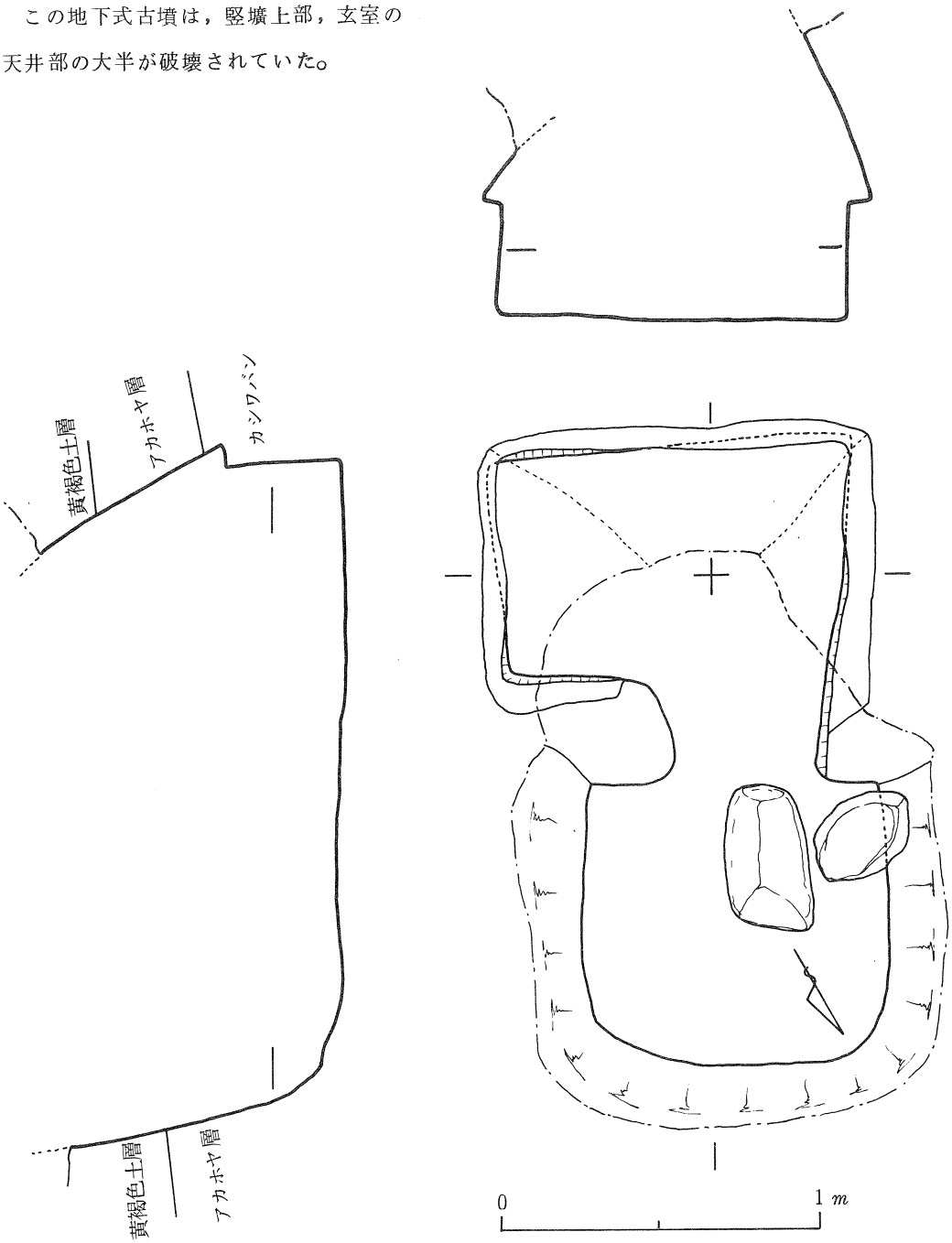
刀子　　現存長 8.7 cm，身長 6.1 cm，身幅 1.0 cm，棟幅 0.3 cm を測る。



第１１図　５５—３号地下式古墳出土刀子実測図

4.　55—4号（第12図）

この地下式古墳は，竪壙上部，玄室の天井部の大半が破壊されていた。



第12図　55—4号地下式古墳実測図

閉塞に用いられたと思われる４５cm大の河原石が２箇竪壙部に残されていた。竪壙の規模は約９０cm×９０cmで，隅丸の正方形状を示している。

玄室は，他の地下式古墳と同様上半分がアカホヤ，下半分がカシワバンに掘り込まれ，主軸はＮ３０°Ｅを示し，竪壙を北東，玄室を南西とする。構造は，右片袖の羨門閉塞・平入り寄棟造りで，棚状施設を四周に設けている。玄室の規模は，約１０５cm×７０cmと小型で，小児用の地下式古墳と推定される。奥壁での棚状施設の高さ３７cm，棚状施設の最大幅１２cm，最小幅は３～５cmを測る。

羨門，羨道，西壁及び奥壁の右からほぼ７０cmまでに塗朱が認められる。

副葬品は検出されず，人骨の遺存はなかった。

5. 日守地下式古墳出土の人骨…… 松下　孝幸（長崎大学医学部解剖学第二教室）

はじめに

宮崎県西諸県郡高原町日守において，１９８０年に４基の地下式古墳が調査され，そのうちの２基（１号墳，２号墳）に人骨が残存していた。１号墳には３体，２号墳には２体の人骨が埋葬されており，保存状態は現場では比較的良さそうに思われたが，古墳内に雨水が浸透していたため，骨が著しく軟弱化しており，実際の遺存程度はあまり良いものではなかった。

この５体の人骨は別項で述べられているように，考古学的所見より，古墳時代に属する人骨である。

著者も含めて，当教室では地下式古墳出土人骨について形質人類学の立場から研究を進めており，本資料も今後の研究の貴重な資料のひとつになると考えられるので，できるかぎり詳細な観察と計測を行なった。その結果を報告したい。

資　料

５体の出土人骨の性別および年令は次のように推定される。

人骨番号	性別	年令	
１号墳１号人骨	男性	熟年	
１号墳２号人骨	不明	幼児	
１号墳３号人骨	女性	壮年	頭部朱
２号墳１号人骨	男性	壮年	頭部朱
２号墳２号人骨	女性	熟年	頭部朱

所　　見

1号墳1号人骨

(1) 頭　蓋

左半分は全く失なわれていたが，右半分は完全に残存していた。

1. 脳頭蓋

右半分は完全に残っており，その骨壁はしっかりしている。外後頭隆起の発達も比較的良いが，乳様突起はあまり大きいものではない。また3主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合については，外板には癒着は認められないが内板は癒着している。なお前頭縫合が外板のみに認められた。

頭蓋の主要計測値は，頭骨最大長が１８５㎜，バジオン・ブレグマ高が１４６㎜で，最大径は計測できないが，その径はあまり大きいものではないようで，頭型については少なくとも短頭の傾向は認められないようである。また正中矢状弧長は３８０㎜である。

2. 顔面頭蓋

顔面頭蓋も半分しか残存していなかった。眉上弓の隆起はやや強く，鼻根部は扁平で，鼻骨は広く，顔面の高径は著しく低い。

計測できたのは，前眼窩間幅２１㎜，眼窩幅４２㎜（右），眼窩高３１㎜（右）だけで，眼窩示数は７3.８１（右）となり，chamaekonch（低眼窩）に属している。顔面の幅径は計測できないが，観察したところやや広い傾向が認められ，また上顎骨の歯槽突起には著しい骨萎縮が認められ，高径の計測もできないが，その高径は著しく低い。

3. 下顎骨

下顎骨も右半分だけが残存していた。下顎枝は幅広く，下顎切痕は浅い。

4. 歯

上顎骨の歯槽突起には著しい骨委縮が認められ，歯槽は閉鎖しており，１本の歯も釘植しておらず，下顎の歯のみが残存していた。その残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

⊗ M_2 ⊗ P_2 P_1 C I_2 I_1	I_1 I_2 C P_1
	・ ・ ・ ・

〔⊗　歯槽閉鎖
・　遊離歯〕

咬耗度は強く，Brocaの3度を示し，また歯石も多い。

(2) 四肢骨

1） 上肢骨

鎖骨，右上腕骨，橈骨が残存していた。

1. 鎖 骨

左側は肩峰端を欠く大部分が，右側は肩峰端部が残存しており，径はあまり大きいものではない。

2. 上腕骨

右側のみが残存していたが，水分を含んでいたため，乾燥による変形が著しく，計測はできない。しかし観察したところでは径は大きいものではないが，三角筋粗面の発達は比較的良い。

3. 橈 骨

左右共骨体の一部のみが残存していたにすぎない。その径は大きいものではない。

2） 下肢骨

左恥骨，大腿骨，左脛骨が残存していた。

1. 大腿骨

右側は骨体の大部分が，左側は骨体の一部が残存していたが，右側骨体ではその前面が欠けているので，推定中央位での計測はできない。粗線の発達はあまり良くはないが，骨体中央部での矢状径はやや大きいようである。また右側の上骨体断面示数は８０.６５となり，強い扁平性は認められない。

2. 脛 骨

右側の骨体遠位のみが残存しており，最小周のみが計測可能で，その計測値は７２㎜であり，あまり大きいものではない。

性別については，四肢骨の径は大きいものではないが，眉上弓の発達が比較的良いことや四肢骨の筋付着部の発達も良いことから男性と推定され，年令は縫合の内板が癒着していること，および歯の咬耗度から熟年と考えられる。

1号墳3号人骨

(1) 頭 蓋

後頭骨は全く失なわれていたが，その他の大部分はほとんど良く残存していた。

1. 脳頭蓋

頭骨最大長および最大幅は計測できないが，観察したところでは幅径はやや狭く，頭型としては，少なくとも短頭の傾向は認められない。またバジオン・ブレグマ高は１３１㎜，横弧長は３００㎜である。

３主縫合のうち冠状縫合と矢状縫合とが観察可能であったが，両縫合共に内外両板とも癒合は全く認められない。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は完全である。眉上弓の隆起はやや弱く，鼻根部は扁平で，鼻骨は広い。また顔面の幅径は広く，高径は著しく低い。

計測値は頬骨弓幅が１３４㎜，中顔幅は１０９㎜，顔面は１０９㎜，上顔高は６４㎜となり，コルマンの顔示数および上顔示数は，それぞれ８1.３４，４7.７６となり，ウィルヒョーの顔示数および上顔示数は１００.００，５８.７２を示し，低・広顔の傾向が強い。

眼窩幅は左右共に４３㎜，眼窩高は左右共に３２㎜で，眼窩示数は左右共に７４.４２を示し，chamaekonch（低眼窩）に属している。

鼻幅は２８㎜，鼻高は５０㎜となり，鼻示数は５６.００を示し，chamaerrhin（広鼻）に属している。また鼻骨最小幅は１３㎜，鼻骨最大幅は１９㎜となり，鼻骨は幅広い。

3. 下顎骨

下顎体のうち左側の第１大臼歯から下顎角に至る部分は失なわれていたが，その他の大部分は良く残存していた。下顎枝は幅広く，下顎切痕は著しく浅い。

4. 歯

歯は良く残存しており，ほとんどが上顎骨および下顎骨に釘植していた。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1 ⊗
M_3	M_2	M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	⊗ M_2 M_3

⊗ 歯槽閉鎖
・ 遊離歯

咬耗度はBrocaの２度である。

(2) 四肢骨

1） 上肢骨

左鎖骨，左橈骨骨体が残存していたが，両者共その径は小さいものである。

2）　下肢骨

寛骨は左右共に腸骨の上半分および恥骨が残存しており，大腿骨は骨体および骨頭とが，また脛骨は骨体が残存していた。なお右膝蓋骨はほとんど完全に残っていた。

1.　大腿骨

左側は表面の剝落が著しく，計測ができたのは右側のみである。推定中央位での矢状径は（25㎜），横径は（22㎜）で，中央断面示数は（113.64）となり，示数値はやや大きいが，粗線の発達はあまり良いものではなく，柱状形成の像も認められない。また中央周は（75㎜）で，小さく，大腿骨頭も小さい。

2.　脛　骨

左右の骨体が残存しており，その径は小さい。

推定中央位での最大径は右（24㎜），左（25㎜），横径は右（19㎜），左（20㎜）となり，中央断面示数は右（79.17），左（80.00）となり，扁平性は認められない。また中央周は右（68㎜），左（70㎜），最小周は左64㎜で，周径も小さい。

性別は頭蓋の形態および四肢骨が小さいことから，女性と推定され，年令は縫合が内板においても癒着していないことや恥骨結合面に平行隆線が認められること，および歯の咬耗度から壮年と考えられる。

2号墳1号人骨

(1)　頭　蓋

脳頭蓋の保存状態は悪いが，その割には顔面頭蓋の遺残程度は良かった。また下顎骨は全く残存していなかった。

1.　脳頭蓋

前頭骨と左側頭骨および頭頂骨の一部しか残存していなかったので，計測は不可能で，頭型を知ることもできない。

2.　顔面頭蓋

顔面は比較的保存が良かったが，右頬骨を欠いていたので，幅径の計測は不可能である。

眉上弓の発達はきわめて良好で，鼻根部もやや陥凹し，鼻骨は広く，顔面は低い。

計測値は上顔高が66㎜で，顔面の高径は低い。

眼窩幅は46㎜（左），眼窩高は左右共に34㎜で，眼窩示数は73.91（左）となり，

chamaekonch（低眼窩）に属している。

鼻幅は３１㎜，鼻高は５５㎜で，鼻示数は５６.３６となり，chamaerrhin（広鼻）に属している。また鼻骨最小幅は１０㎜，鼻骨最大幅は１８㎜で，鼻骨は広い。

3.　歯

歯は上下両顎共良く残っていたが，下顎骨が残存していなかったので，下顎についてはすべて遊離歯である。残存歯を歯式で示すと次のとおりである。

	○	P_1	C	I_2	○	※ I_1	I_2	C	○	○	M_1	M_2
M_1	P_2	P_1	C	I_2	I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・

〔○　歯槽開存
・　遊離歯
※　歯冠のみ〕

なお咬耗度はBrocaの１～２度である。

(2)　四肢骨

１）　上肢骨

右鎖骨の大部分，右上腕骨，右橈骨および右尺骨の骨体の一部が残存していた。

1.　上腕骨

右側の遠位半が残存していたが，後面は欠損してるため，計測はできなかった。遠位端の関節部は大きいが，骨体はやや細い。

2.　橈　骨

右側のみが完全に残存していた。橈骨粗面や骨間縁の発達はあまり良くなく，細くて長い。

最大長は２２８㎜，機能長は２１４㎜でやや長く，最小周は３５㎜でやや細い。長厚示数は１６.３６を示し，きゃしゃな傾向がうかがえる。また骨体横径は１５㎜，骨体矢状径は10㎜で，骨体断面示数は６６.６７となる。

２）　下肢骨

右寛骨および仙骨はほぼ完全である。また右大腿骨も良く残存していた。

1.　大腿骨

左側は骨体のごく一部のみが残存していたにすぎないが，右側の保存状態は良い。その径はあまり大きいものではなく，粗線の発達もあまり良くないが，殿筋粗面の発達は良好で，結節を作っている。

右側の最大長は４２０㎜，自然位全長は４１４㎜で，長径はやや長く，中央周は８８㎜で，長厚示数は２１.２６を示し，あまり頑丈なものではないことがうかがえる。また中央矢状径は２９㎜，中央横径は２６㎜で，中央断面示数は１１１.５４を示している。

(3) 推定身長

右大腿骨最大長からPearsonの公式を用いて，推定身長値を算出すると１６０.２７㎝となり，藤井の公式を用いて算出すると１５８.６４㎝となる。

また右橈骨最大長からPearsonの公式を用いて推定身長値を算出してみると，１６０.５０㎝となり，藤井の公式を用いて算出してみると１５７.９４㎝となり，Pearsonの公式での推定身長値をみるかぎりでは，やや高身長である。

推　定　身　長　値

	Pearson法	藤　井　法
右大腿骨	１６０.２７㎝	１５８.６４㎝
右　橈　骨	１６０.５０㎝	１５７.９４㎝

性別については，眉上弓がよく発達していることや寛骨の大坐骨切痕の角度が小さいことから，男性と推定され，年令は縫合が内板においても癒着していないことや歯の咬耗度が弱いことおよび恥骨結合面に平行隆線が残存していることから壮年と考えられる。

２号墳２号人骨

４体の成人骨の中ではこの人骨の保存状態が最も悪かった。

(1) 頭　蓋

前頭骨の前頭鱗の一部が残存していたにすぎないが，その骨壁はやや厚い。また前頭縫合が外板に残存していた。

(1) 上肢骨

左上腕骨の遠位端，左側の橈骨と尺骨のそれぞれ骨体が残存していたにすぎない。

1. 橈　骨

左側の骨体が残存していたが，その径は大きいものではない。

骨体横径は１６㎜，骨体矢状径は１０㎜で，骨体断面示数は６２.５０となり，推定中央位での横径は１５㎜，矢状径は１０㎜，中央周は４０㎜で，中央断面示数は６０.００である。

2. 尺　骨

左尺骨の骨体のうち近位半が残存していた。その径はあまり大きいものではないが，骨間縁の発達は良好である。

尺骨矢状径と尺骨横径のみが計測可能で，計測値はそれぞれ１１㎜，１５㎜で，骨体断面示数は７３.３３である。

(2)　下肢骨

寛骨は右の腸骨と恥骨とが，左は恥骨が残存しており，大腿骨は右側の骨体，遠位端及び骨頭とがそれぞれ分離した状態で残存していた。また右膝蓋骨も残存していたが，脛骨は全全く残っていなかった。

1. 大腿骨

径はやや小さく，骨体上横径は２８㎜，骨体上矢状径が２３㎜で，上骨体断面示数は82.14となり，強い扁平性は認められない。

性別については，恥骨下角が大きいことから女性と推定され，年令は恥骨結合面の状態および腰椎の性状から熟年と考えられる。

総　　括

宮崎県高原町日守において，１９８０年に地下式古墳が4基調査され，そのうちの２基から合計５体の人骨が出土した。人骨の保存状態は必ずしも良好なものではなかったが，顔面部は比較的良く保存されていた。これら５体の人骨のうち４体の成人骨について観察および計測を行なった。その結果を要約すると次のとおりである。

1. １号墳には男性，女性，幼児がそれぞれ１体づつ合計３体が，２号墳には男性，女性が各１体づつ合計２体が合葬されていた。
2. 頭型については，男女共に計測を行ない示数値を出せるものは１例もなかったが，観察できるものがそれぞれ１例づつあった。この２例を観察したところでは，短頭の傾向は認められない。
3. 顔面については，男女共に低・広顔の傾向が著しい。
4. 眼窩および鼻についても顔面と同様の傾向が認められ，高径が低い。また鼻根部は扁平で，鼻骨は幅広い。
5. 下顎枝幅は幅広く，下顎切痕は浅い。
6. 四肢骨は一般的に細く，扁平性および柱状形成は認められない。

頭蓋主要計測値　　（mm）

		1号墳1号（男性）	2号墳1号（男性）	1号墳3号（女性）
1.	頭骨最大長	185		
8.	頭骨最大幅			
17.	バジオン・ブレグマ高	146		131
8／1	頭骨長幅示数			
17／1	頭骨長高示数	78.92		
17／8	頭骨幅高示数			
9.	最小前頭幅		94	94
10.	最大前頭幅			113
11.	両耳幅			126
7.	大後頭孔長	34		
16.	大後頭孔幅	28		
16／7	大後頭孔示数	82.34		
24.	横弧長			300
25.	正中矢状弧長	380		
43.	上顔幅		105	105
45.	頬骨弓幅			134
46.	中顔幅			109
47.	顔高			109
48.	上顔高		66	64
47／45	顔示数（K）			81.34
48／45	上顔示数（K）			47.76
47／46	顔示数（V）			100.00
48／46	上顔示数（V）			58.72
50.	前眼窩間幅	21	17	21
44.	両眼窩幅			103
50／44	眼窩間示数			20.39
51.	眼窩幅	42（右）	46（左）	43（右）43（左）
52.	眼窩高	31（右）	34（右）34（左）	32（右）34（左）
52／51	眼窩示数	73.81（右）	73.91（左）	74.42（右）74.42（左）
54.	鼻幅		31	28
55.	鼻高		55	50
54／55	鼻示数		56.36	56.00
57.	鼻骨最小幅		10	13
57(1)	鼻骨最大幅		18	19
57／57(1)	横鼻骨示数		55.56	68.42

7. 男性の推定身値が１例ではあるが，算出できた（２号墳２号人骨）。その推定値は１６０.２７cmとなり，やや高身である。

8. 南九州，とくに日向南部，薩摩および大隅地方に特有な埋葬施設である地下式古墳から出土する人骨の形質については，人骨の保存状態が必ずしも良くないこともあって，未解明の点も多い。

以前からこの地下式古墳出土人骨について，研究を続けている内藤（１９７３・１９７４），内藤ら（１９７６）によれば，地下式古墳人の特徴は，短頭で低・広顔で，身長は必ずしも低くないことが指摘されている。

今回報告した日守地下式古墳出土の４体の成人骨については，短頭の傾向は認められなかったが，低・広顔の傾向は著しく，また男性の推定身長値もやや大きいものであった。頭型が必ずしも短頭型を示さないことは，内藤（１９７４）も指摘しているように，地下式古墳人の特徴は単純なものではなく，南九州のなかにおいても，多少の差があるものと考えられ，今後資料を収集することによって，更に詳細な検討を行ない，南九州古墳人の形質人類学的な解明を進めていきたい。

（擱筆するにあたり，本研究の機会を与えていただいた高原町教育委員会，宮崎県教育委員会文化課，およびご指導いただいた内藤芳篤をはじめ，教室員諸兄に感謝致します。）

参考文献

1. 城　一郎，１９３８：古墳時代日本人の人類学的研究。人類学輯報，第１輯：１－４３７。
2. Martin－Saller，１９５７：Lehrbuch der Anthropologie Bd. 1. Gustav Fischer Verlag，Stuttgart.
3. 内藤芳篤，１９７３：灰塚地下式横穴人骨。灰塚遺跡：７２－７７。
4. 内藤芳篤，１９７４：人骨とその埋葬方法。大萩遺跡(1)：５５－６２。
5. 内藤芳篤，松下孝幸，１９７６：南九州出土の古墳時代人骨。解剖誌，５１：２７９。
6. 佐野　一，１９６６：九州地方古墳時代人骨の研究（予報）。日本人類学会・民族学会連合大会第２０回記事：２１２－２１４。
7. 島　五郎，寺門之隆，１９５７：近畿地方古墳時代人頭骨について（略報）。人類誌，６６：５７－６４。
8. 鈴木　尚，１９６３：日本人の骨。岩波書店，東京，５８－６４。

6. 日守地下式古墳出土の幼児骨

分部　哲秋（長崎大学医学部解剖学第２教室）

はじめに

宮崎県高原町日守において１９８０年に４基の地下式古墳が調査され，そのうち２基（１号墳，２号墳）より総数５体の人骨が出土した。これら５体の人骨中１体が幼児骨で，この幼児骨は１号墳の１号，３号両人骨の間の腹部から大腿部にかけて置かれていた。なお，これらの人骨は別項で述べられているように，考古学所見により，古墳時代に属するものである。

筆者は，各遺跡より発掘される幼小児骨に注目し，当時の幼小児の成長，化骨あるいは歯の萌出などの問題を研究するため，現在資料を収集中である。ここで報告しようとする日守地下式古墳出土の幼児骨は，保存状態が悪くその形質については明らかにできないが，できる限り詳細な観察と年令の推定を試みたので，その結果を報告したい。

資料および所見

この幼児骨は保存状態が悪く，頭蓋および軀幹骨の一部が残っていたにすぎず，四肢骨は全く残存していなかった。

(1)　頭　蓋

脳頭蓋では蝶形骨が完全に残っていたほか，前頭骨の右眼窩部から右側頭面にかけて，左右側頭骨の鱗部，右頭頂骨の一部が残存していた。これらは接合復元することが不可能であり，頭型を窺うことはできない。顔面頭蓋では，右上顎骨が完全に残っており，下顎骨は右第１乳臼歯から左第１乳臼歯までの下顎体が残存していた。

歯は遊離歯を含め１８本残存し，歯式で示すと次のとおりである。

$$\frac{(m_2)\ m_1\ \bigcirc\ \bigcirc\ \bigcirc\ \overset{\cdot}{i}_1\ \overset{\cdot}{i}_2\ /\ \overset{\cdot}{m}_1\ (\overset{\cdot}{m}_2)}{(\underset{\cdot}{m}_2)(m_1)\ (c)\ i_2\ i_1\ i_1\ i_2\ (c)\ (m_1)(\underset{\cdot}{m}_2)}$$

$$(I_1)(\overset{\cdot}{I}_1)$$

○	歯槽開存
・	遊離歯
（ ）	未萌出
／	不　明

(2) 軀幹骨

椎骨および肋骨の一部が残存していた。

椎骨では，椎体と椎弓がそれぞれ分離しており，椎体が2個残存し，椎弓は，左右両半部が骨結合され完全なものが1個，右半部が3個，左半部が6個残存していた。椎弓の左半部6個のうち3個は，椎弓中央部に癒合面が残っており，これらの椎弓にはまだ椎弓の左右両半部の骨性癒合が起っていない。なお，これらの椎骨の順位は判定できないが，椎体と椎弓間および椎弓の左右両半部の骨性癒合は，椎骨の上部より起こるので，上記の椎弓左半部3個は，左右が骨結合したものよりは下部に位置する。

肋骨は右側のものが１０本，左側が3本残存していた。

(3) 推定年令

この幼児骨の歯の萌出状態を観察すると，上顎第1乳臼歯が萌出し，下顎第1乳臼歯は萌出途中にある。

藤田（１９６５）によると，現代人の乳歯の萌出時期（日齢）は，

	男（平均）	女（平均）
上顎第1乳臼歯	５３０	４９７
下顎第1乳臼歯	５３１	５２１

となっており，$\underline{m_1}\rfloor\ \lfloor\underline{m_1}$，$\overline{m_1}\rceil\ \lceil\overline{m_1}$ の萌出は男女に若干の差があるものの，ほぼ1才半位で起こる。

古墳時代における乳歯の萌出時期が，現代人のそれと同じと仮定するならば，日守地下式古墳出土の幼児骨の年令は，1.5才と推定される。

なお，幼小児の性別に関しては種々の研究がなされているが，判定が難しいのが現状であり，この幼児骨の性別は不明である。

総　括

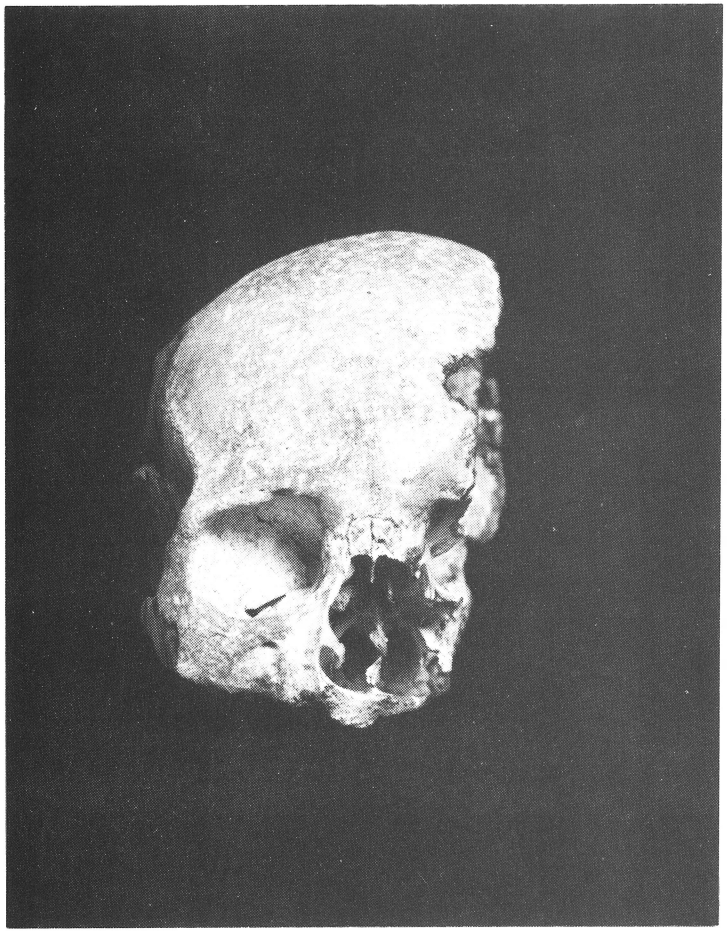
日守地下式古墳出土の幼児骨は，保存状態が悪く計測はできなかったが，上記の観察所見の結果を要約すると次のとおりである。

1. 日守地下式古墳出土の人骨5体のうち，幼児骨は1体（２０％）である。
2. この幼児骨の年令は，乳歯の萌出状態から仮定すると，おおむね1.5才と推定される。
3. 残存していた椎骨の椎弓には，左右両半部の骨性癒合が完成しているものが1個，骨性癒合が起っていないものが，3個存在している。

（擱筆するにあたり，本研究の機会を与えていただいた高原町教育委員会，宮崎県教育委員会文化課，ならびに人骨についてのご指導をいただいた内藤芳篤教授に感謝致します。）

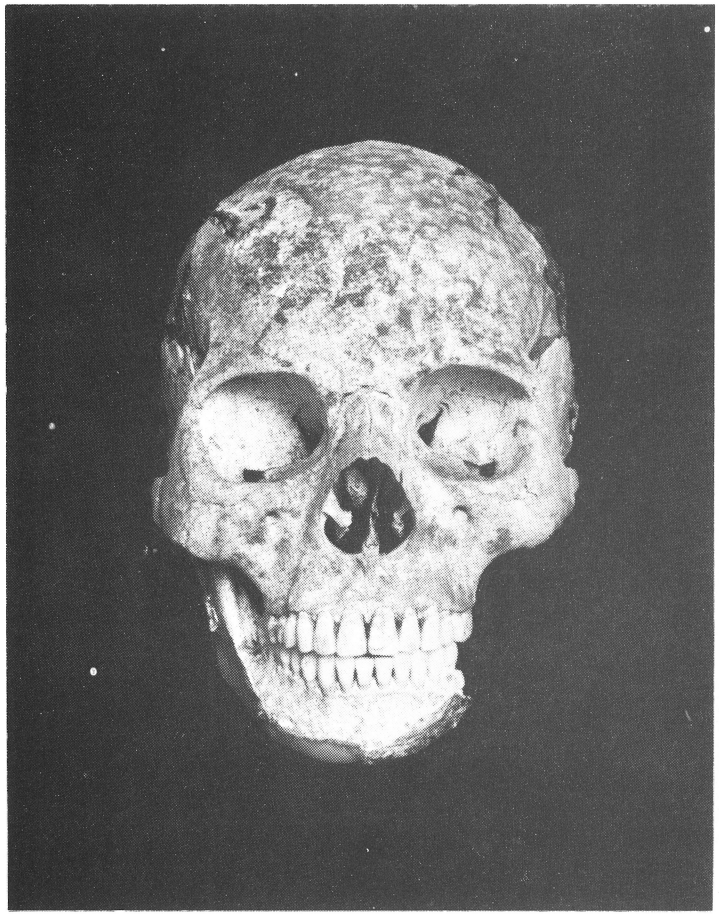
参考文献

1. 藤田恒太郎：1965，歯の話，岩波，東京，57－98
2. 松下孝幸・分部哲秋：1980，熊本県興善寺四郎丸遺跡出土の近世人骨，興善寺Ⅱ，59－68
3. 松下孝幸・分部哲秋：1980，五島・白浜貝塚出土の縄文晩期人骨，　白浜貝塚，120－133
4. 分部哲秋：1981，長崎県宮の本遺跡出土の弥生時代幼小児骨，宮の本遺跡

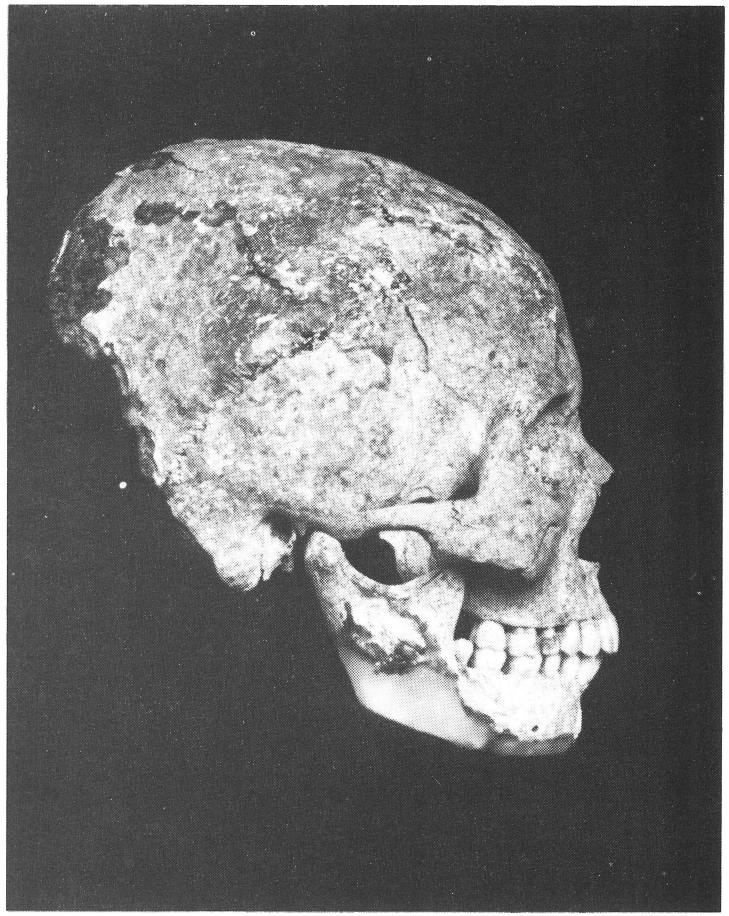


1号墳 1号人骨（熟年男性）　頭蓋側面観

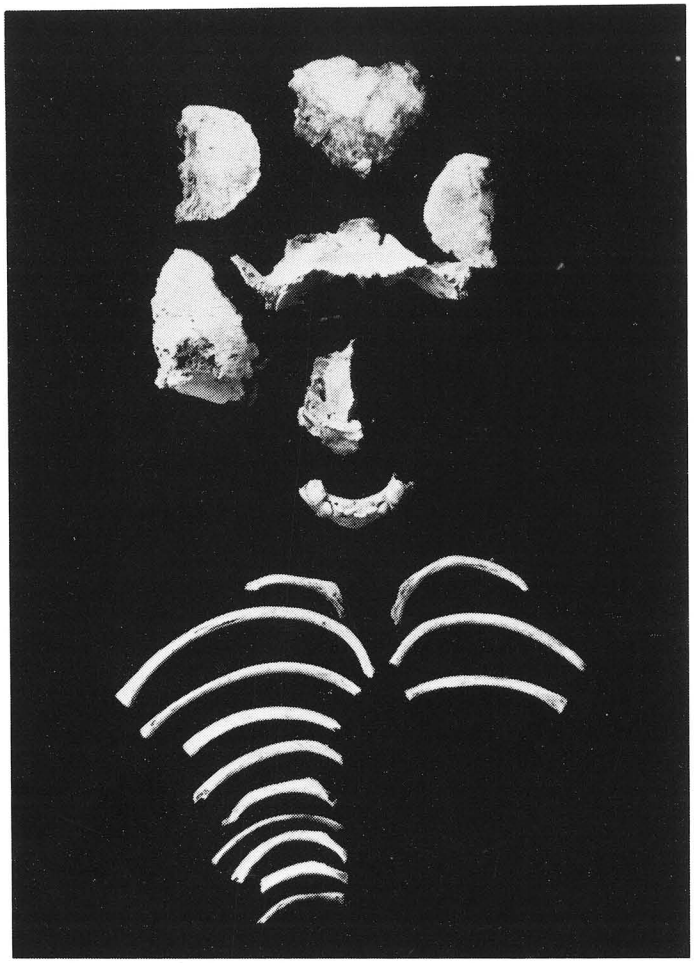
1号墳 1号人骨（熟年男性）　頭蓋正面観



1号墳3号人骨（壮年女性）　頭蓋側面観



1号墳3号人骨（壮年女性）　頭蓋正面観



1号墳2号人骨（幼児）

Ⅳ 結　語

今回の調査は，昨年に引き続き合計８基の地下式古墳について，日守地下式古墳群に関する資料を得るものとなった。ことに昨年調査分の４基が，副葬品も少なく年代決定に若干の問題を残したのに対し，今回調査の対象となった５５－２号は，副葬品の数が多く，また年代観の検討に良好な資料を有していた。

以下，次の諸点について検討を行ってみたい。

(1)　いわゆる「彩色線文」について

５５－２号には，いわゆる「彩色線文」が施されていた。地下式古墳の「装飾」については，旭台地下式古墳群の発掘調査で注目されて以来，その類例を増している。しかし，それを単純に「装飾古墳」の範疇に含め得るか否かには多くの問題があり，常に「装飾古墳」の概念範疇を無限大に拡大する危険性もはらんでいることを忘れるべきではないだろう。

５５－２号の「彩色線文」は，大萩地下式古墳３６号に類するもので，旭台地下式古墳において見られた明らかな構図は見出せない。

５４－１号の斗を表現したと思われる東柱の浮彫と共に興味ある資料である。

(2)　被葬者の状態

被葬された人骨は，成人骨４体，幼児骨１体の合計５体であった。この内，５５－１号の成人骨２体は，１号人骨が伸展葬，２号人骨が立膝葬で，５５－２号の成人骨２体は，１号人骨がやや立膝ぎみの埋葬であったと思われる。今回の調査で，最も注目されたのは，５５－１号に被葬された幼児骨１体である。この幼児骨は１号人骨の腹部にいわばへばり付いた状態で被葬され，幼児骨の良好な遺存もあいまって，地下式古墳の被葬者の関係と被葬単位を再考する上で注目される。

(3)　地下式古墳の群構造

地下式古墳の位置関係及び玄室方向については，調査の結果の中ですでに触れているので重複を避けるが，小林市，須木村，野尻町，高原町，高崎町など小林盆地の縁辺に位置する丘陵地に形成される地下式古墳については，地形的条件と群構造への意識との両者を考慮に入れる必要があろうと思われる。比較的，地下式古墳を構築するに有利と思われる場所を占地した地下式古墳の編年的先行が妥当とされるならば，群内における営造の過程がただされる可能性がある。

(4) 地下式古墳の年代観

５５－２号は，小林盆地周辺に分布する地下式古墳としてはめずらしく，豊富な副葬品をもつものであった。年代決定の一助となると思われる遺物としては，鉈及び鍬先があり，鉈は近接する仮屋尾地下式古墳３号からも２本出土している。５５－２号においても，鍬先に銹着した状態での施と奥壁棚状施設上の鉈との２本が出土している。これで，県内地下式古墳出土の施は，１５例（１７点）となった。鍬先の年代観は，５世紀代のもので，鉈の年代観は，県内の出土例とも合わせ５世紀～６世紀初頭のものとみるのが妥当であろうと思う。従って，５５－２号の年代は，一応５世紀代にとどめ置くべきと考える。

図版1

日守地下式古墳５５－２号南壁彩色線文

図版2

(1)　遺　跡　遠　景

(2)　1号地下式古墳玄室状況（発見時）

図版3　1号地下式古墳

(1)　人　骨　状　況

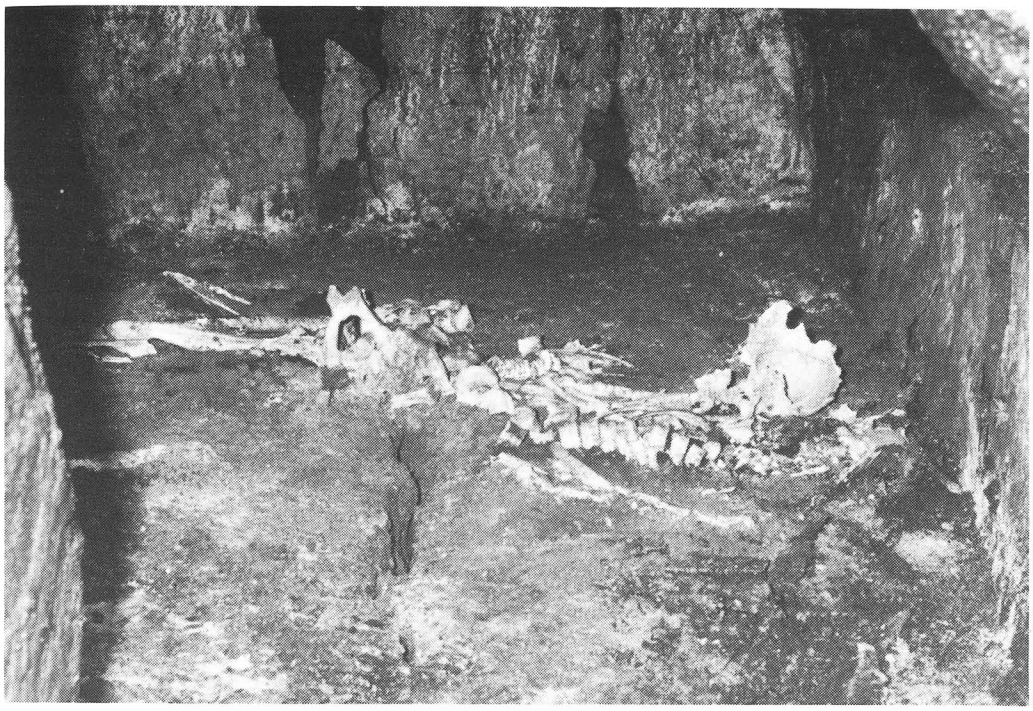
(2)　2号人骨（腹部に小児骨）

図版4　1号地下式古墳

(1)　天　井　の　状　態

(2)　遺　物　状　況

図版5　2号地下式古墳

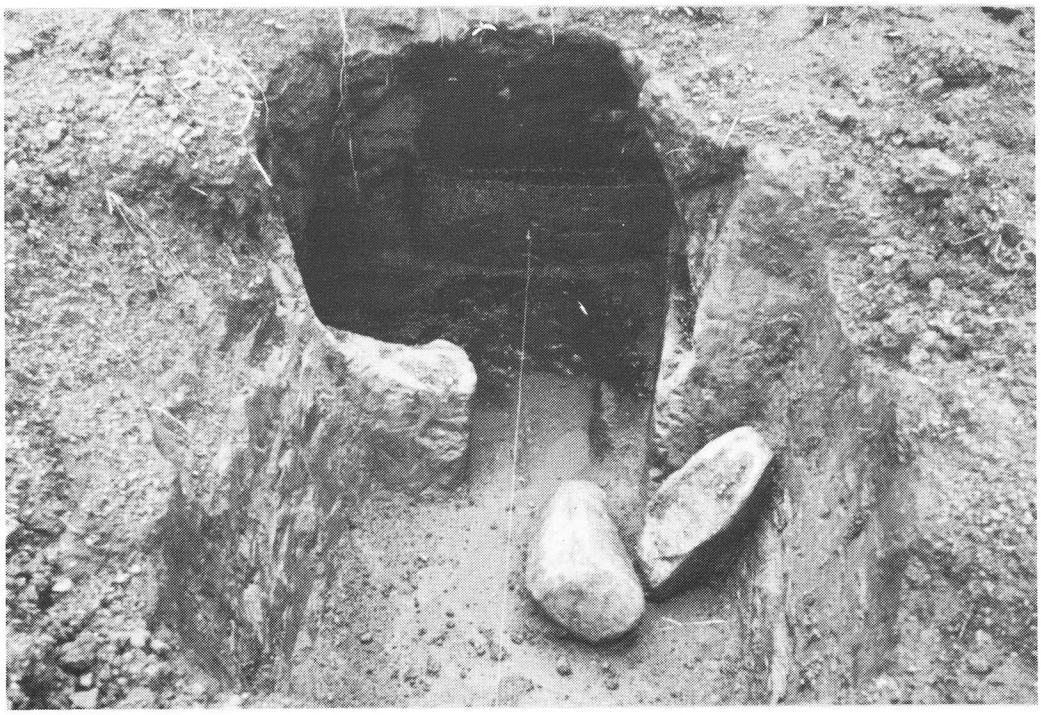


(1)　玄　室　内　全　景

(2)　貝　輪　の　状　態

図版6

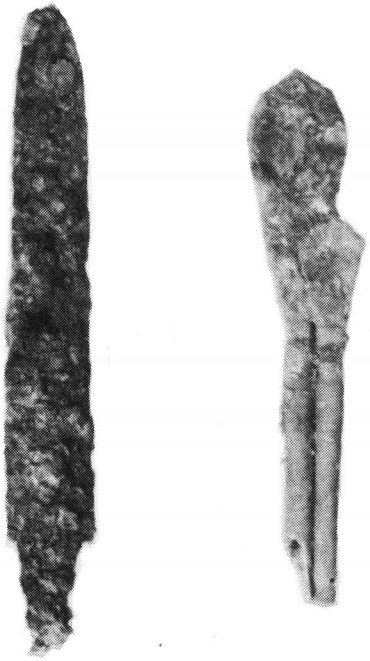
(1)　3号地下式古墳



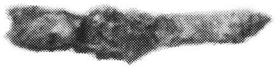
(2)　4号地下式古墳

2号地下式古墳出土副葬品

図版8

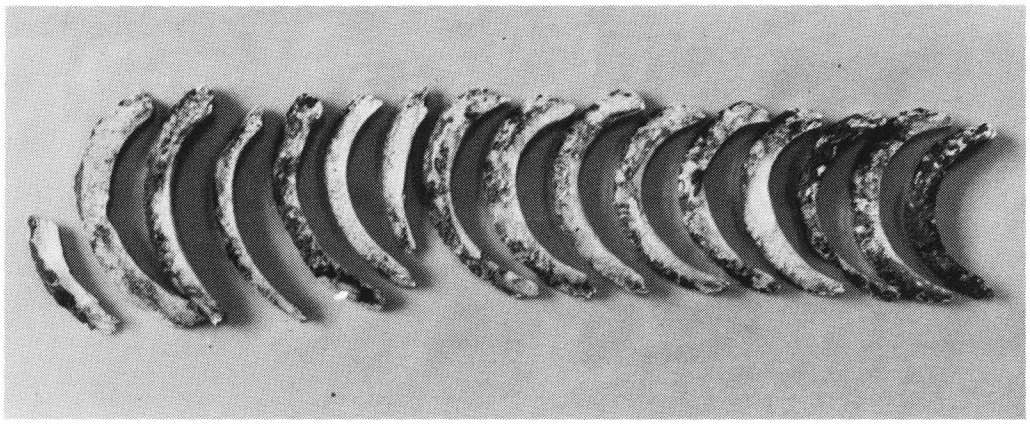


1号地下式古墳出土副葬品



3号地下式古墳出土刀子

1号地下式古墳出土貝輪



2号地下式古墳出土貝輪

上　沖　遺　跡　発　掘　調　査

北諸県郡三股町大字樺山字上沖4332－6

県文化財保護審議会委員　石　川　恒太郎

県文化課主任主事　岩　永　哲　夫

県文化課主事　北　郷　泰　道

本　文　目　次

Ⅰ　所　在　地 …… （北　郷） …… 199
Ⅱ　発見の契機と調査に至る経過 …… （　〃　） …… 199
Ⅲ　調査の結果 …… （　〃　） …… 200
　1. 遺　構 …… 200
　2. 遺　物 …… 202
Ⅳ　ま　と　め …… （　〃　） …… 203

挿　図　目　次

第1図　遺跡所在地図 …… 199
第2図　上沖遺跡遺構配置図 …… 200
第3図　2号集石遺構実測図 …… 201
第4図　上沖遺跡出土陶磁器実測図 …… 203
第5図　上沖遺跡柱状土層図 …… 203

表　目　次

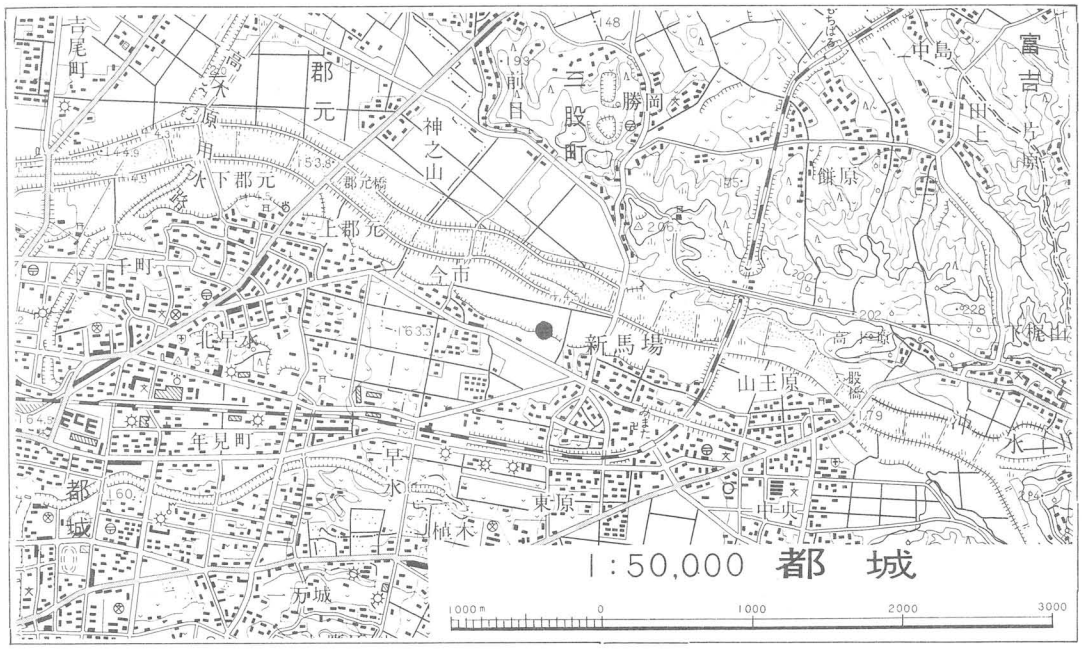
鞴の羽口計測一覧表 …… 202

図　版　目　次

図版 1　(1)　1 号集石遺構 …… 205
　　(2)　2 号集石遺構全景 …… 205
図版 2　(1)　2 号集石遺構 …… 206
　　(2)　2 号集石遺構 …… 206
図版 3　(1)　2 号集石遺構 …… 207
　　(2)　溝状遺構 …… 207
図版 4　鞴の羽口及び鉄滓群 …… 208
図版 5　出土陶磁器片 …… 209

Ⅰ 所　在　地（第1図）

上沖遺跡は，大淀川の支流沖水川南岸の低位河岸段丘上に位置し，三股町大字樺山字上沖４３３２－６に所在する。日豊本線東都城駅から北西約２Kmの地点である。



第１図　　遺跡所在地図（●印）

Ⅱ 発見の契機と調査に至る経過

昭和５５年４月１０日，三股町都市計画課による土地区画整理事業の工事中，集石遺構が発見され，同町教育委員会では６月３日，集石遺構中から鞴の羽口及び鉄滓等が検出されたことから製鉄遺跡の可能性もあるとして，県文化課に現地確認を要請してきた。

文化課では，翌６月４日，県文化財保護審議会委員石川恒太郎氏と共に現地確認を行い，製鉄遺跡の可能性大としながらも，露出した現状の遺構からは幾つかの不明な部分があり，又同地の開発が避けられないことから，７月１５日から７月２１日まで確認のための発掘調査を実施することにした。

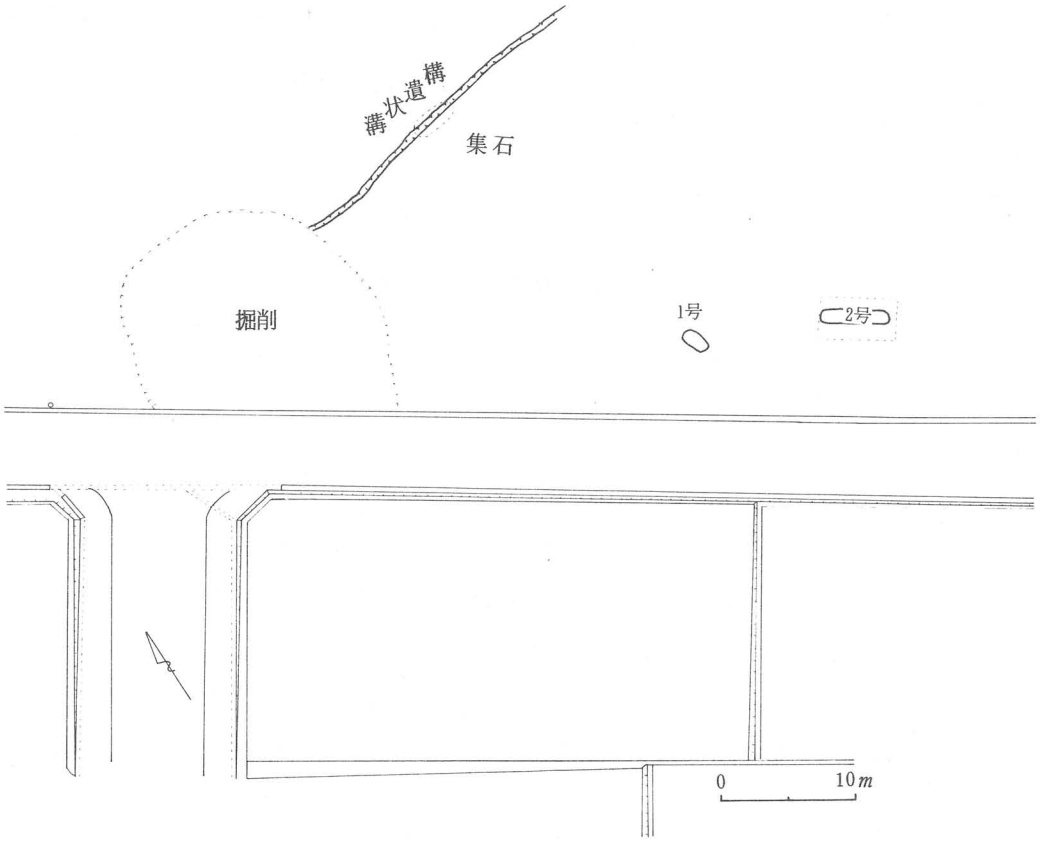
Ⅲ 調査の結果

1. 遺　構（第2図）

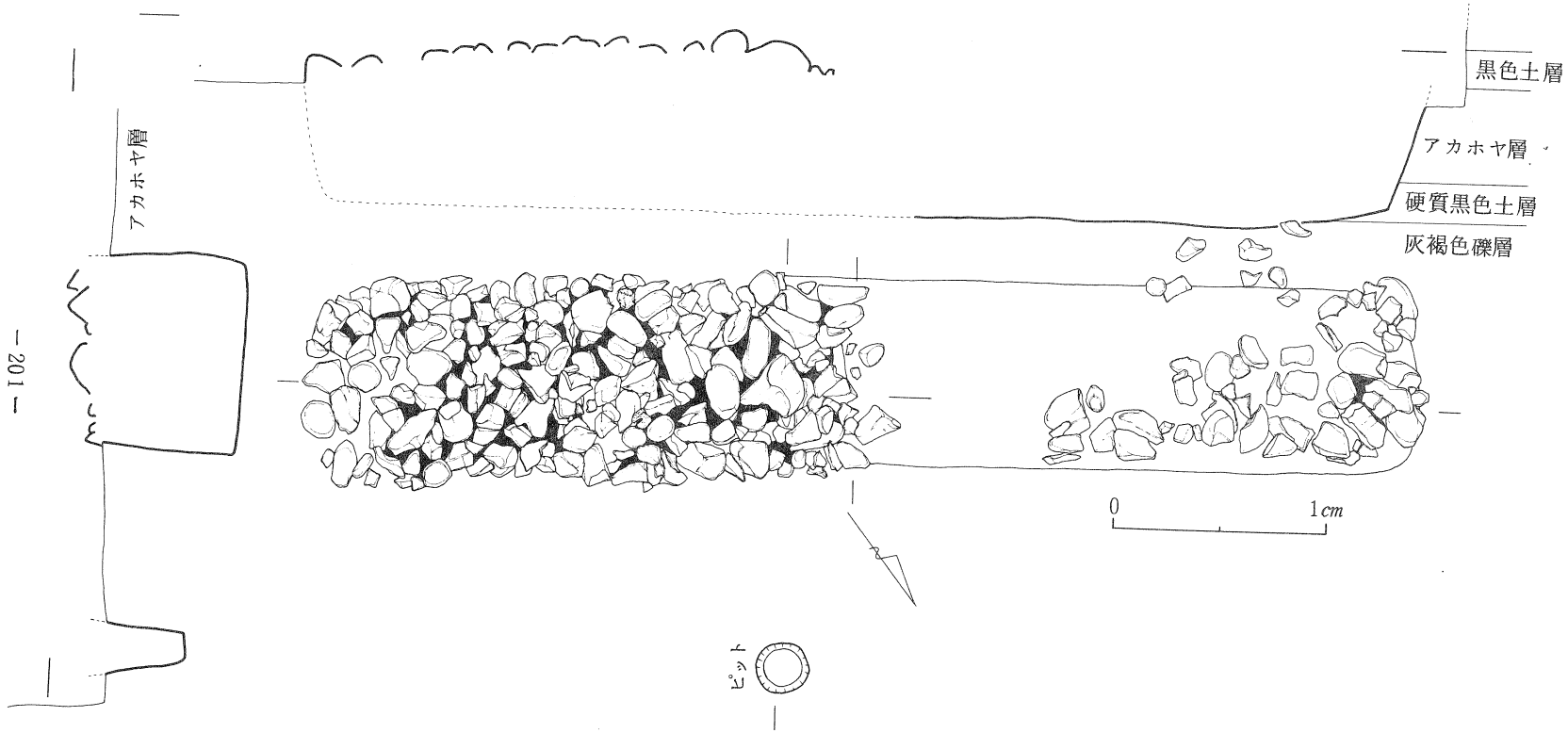
集石は，同地内に3箇所程発見されたが，2箇の集石は重機による削平を著しく受け攪乱されており，記録にとどめ得たものは1箇の集石遺構のみである。又，同地北側にほぼ東西に延びる溝状遺構が検出されたが，集石の1箇がこの溝状遺構上に認められたのみで，性格・年代を決定する遺物は検出されなかった。

1号集石としたものは，既に攪乱著しく集石の状況は記録にとどめ得なかったが，掘り込みの主軸はN 23°Wの方向をとり，1×2.2 mのやや楕円形に近い形状を示すものであった。攪乱された集石内からは陶磁器片，鞴の羽口片，鉄滓等が検出されている。

2号集石としたものは，中央部付近が著しく攪乱されていたが，東半分は原形をとどめていた。主軸はN 51°Wの方向をとり，長さ5 m 28 cm，幅88 cmを測る。遺構はアカホヤ上



第2図　上沖遺跡遺構配置図



第3図　　2号集石遺構実測図

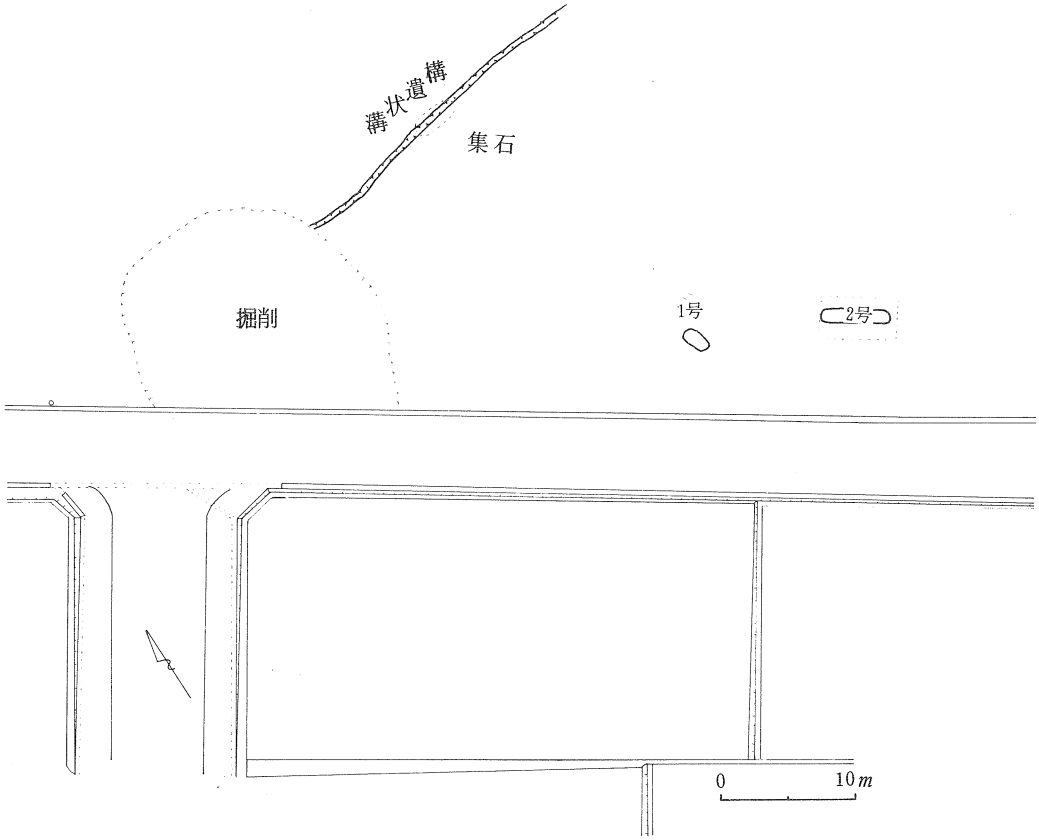
Ⅲ 調査の結果

1. 遺　構（第2図）

集石は，同地内に3箇所程発見されたが，2箇の集石は重機による削平を著しく受け攪乱されており，記録にとどめ得たものは1箇の集石遺構のみである。又，同地北側にほぼ東西に延びる溝状遺構が検出されたが，集石の1箇がこの溝状遺構上に認められたのみで，性格・年代を決定する遺物は検出されなかった。

1号集石としたものは，既に攪乱著しく集石の状況は記録にとどめ得なかったが，掘り込みの主軸はN23°Wの方向をとり，1×2.2mのやや楕円形に近い形状を示すものであった。攪乱された集石内からは陶磁器片，鞴の羽口片，鉄滓等が検出されている。

2号集石としたものは，中央部付近が著しく攪乱されていたが，東半分は原形をとどめていた。主軸はN51°Wの方向をとり，長さ5m28cm，幅88cmを測る。遺構はアカホヤ上



第2図　上沖遺跡遺構配置図

面から掘り込まれており，底面幅は９０cmとやや底が広くなっている。拳大から人頭大の礫は，深さ約６５cmのその中にほぼ隙間なく詰められていた。集石内からは，１号集石と同じく陶磁器片，鞴の羽口片，鉄滓が検出された。（第３図）

2. 遺　物（第４図，図版４，５）

陶磁器片（第４図，図版５）

青磁，白磁を含む陶磁器片が１０数点出土している。５，６は，青磁底部片で１３～１４世紀頃のものと思われる。また，備前の擂鉢底部片も出土しており，時期的には前記の青磁片より後出するものと考えられる。

鞴の羽口（図版４）

鞴の羽口は，１１点採集されたが，みな破片で完形のものはない。１は，羽口とみるには若干疑問が残るが，他も外径１１cm～１５cm，孔径２～３cmとやや大型のものであろう。

２，３，５，８などは火口に装着される部分が溶解し，３では端部が斜めに溶解し，羽口の着装角度をある程度推定することが出来る。炉壁が垂直であることを前提とした場合その角度は，約30°である。

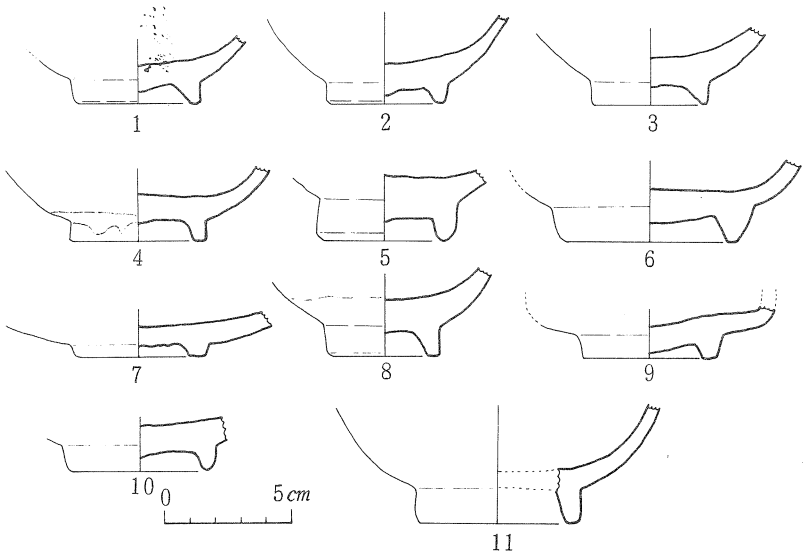
表　　鞴の羽口計測一覧表

（単位　cm）

番号	現存の長さ	外　径（現存幅）	孔　径（現存幅）	備　　考
1	12.4	25.4	3.4	片面が鉢状に凹んでいる。
2	20.4	（　9.5）	3.0	片端が溶解している。
3	13.6	（14.8）	（　2.3）	片端が溶解している。
4	15.3	（14.0）	（　2.5）	
5	17.1	10.7	2.3　2.6	片端がかなり溶解している。 ２穴
6	14.3	11.4	2.1	
7	9.7	15.4	2.3	
8	10.4	（12.9）	（　1.5）	端部の溶解度が著しい。
9	11.6	（11.5）	（　2.0）	
10	13.6	（　9.6）	（　1.4）	細　片
11	18.6	11.8	2.3	鉄滓が付着している。

鉄　滓（図版４）

鉄滓は約７０点近く採集されている。最も大きなものが１３cm大で，他は４～６cm大のものが多い。



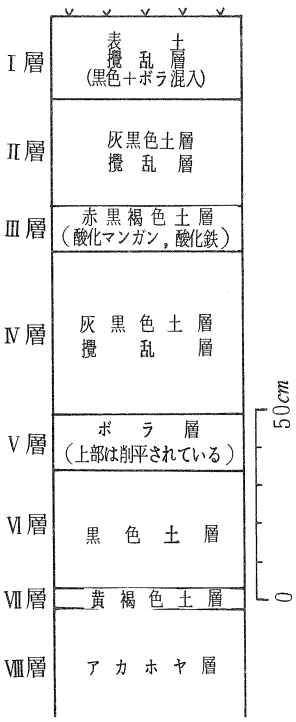
第４図　　上沖遺跡出土陶磁器実測図

Ⅳ　ま　と　め

当初，製鉄遺跡を想定して調査を進めたが，ついに製鉄遺跡，ことに製鉄炉跡として確証付けられるものは得られなかった。しかし，鞴の羽口は，鉄滓等が検出されたことは，この遺跡が全く製鉄と無関係に存在したものではないということを示していよう。

次に幾つかの問題点を指摘しておこう。

遺構は，現地表面から約１ｍ５０cmの深さのところに存在したが，土層の観察によれば，遺構は少なくともボラ層下層まで削平されたところから築かれている。土層図にみるようにボラ層下層上の土層は攪乱層であり，Ⅲ層にみる酸化マンガン，酸



第５図　　上沖遺跡柱状土層図

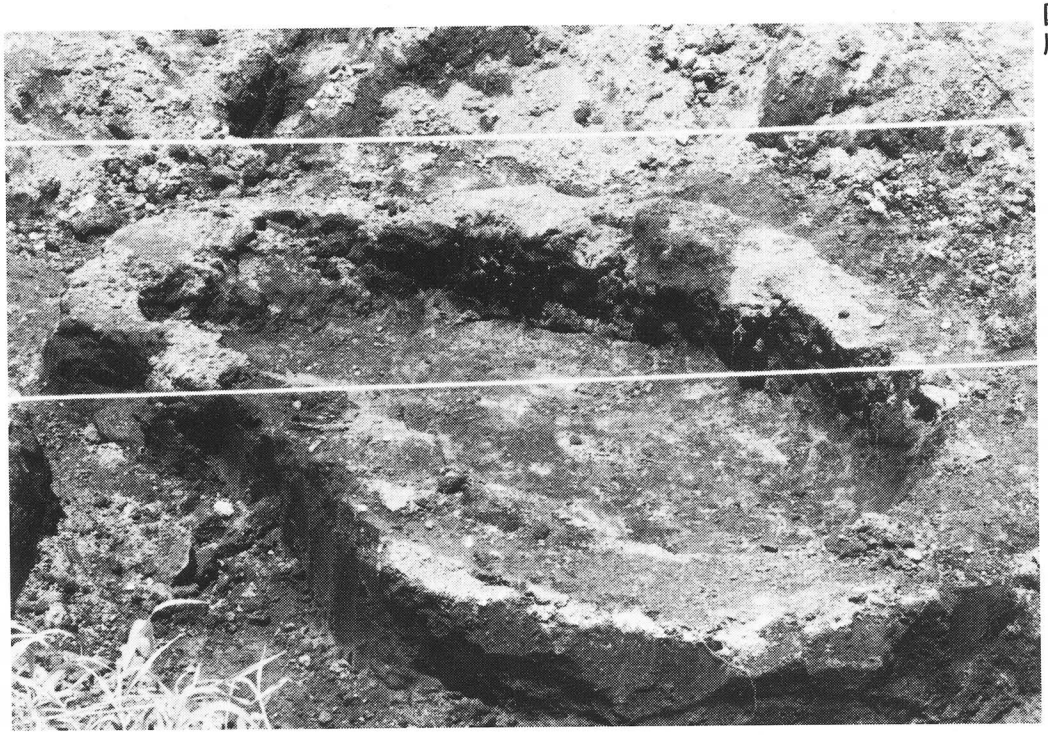
化鉄の沈澱は，同地が水田として利用されていたことを示している。ここで問題となるのは，こうした削平が遺跡地のどの範囲を占めるのかであるが，北側の溝状遺構はボラ層に掘り込まれており，削平は受けていず，又遺跡地の両側も同様ボラ層が残っている。従って，2箇の集石遺構周辺はすでに重機による掘削を受けており，確実なことは言えないが，1号集石，2号集石を中心とする限られた場所が掘り下げられ，そこに土坑と集石が築かれたと考えられよう。

集石遺構は，礫がほとんど隙間なく詰められ，その中に鞴の羽口，鉄滓，陶磁器片が不規則に混入した状態で，これらのものは投棄されたものと見る方が妥当であろうし，遺構の形態も製鉄炉としては態を成さない。従って，遺構の性格としては多くの問題を残しているが，何らかの製鉄遺跡との関係をもつ集石遺構という消極的な結論をここでは下すしかない。

遺構の年代としては，出土した陶磁器片から中世の所産と考えられる。

なお，遺構周辺は公園地となるため，現状のまま埋め戻しを行っている。

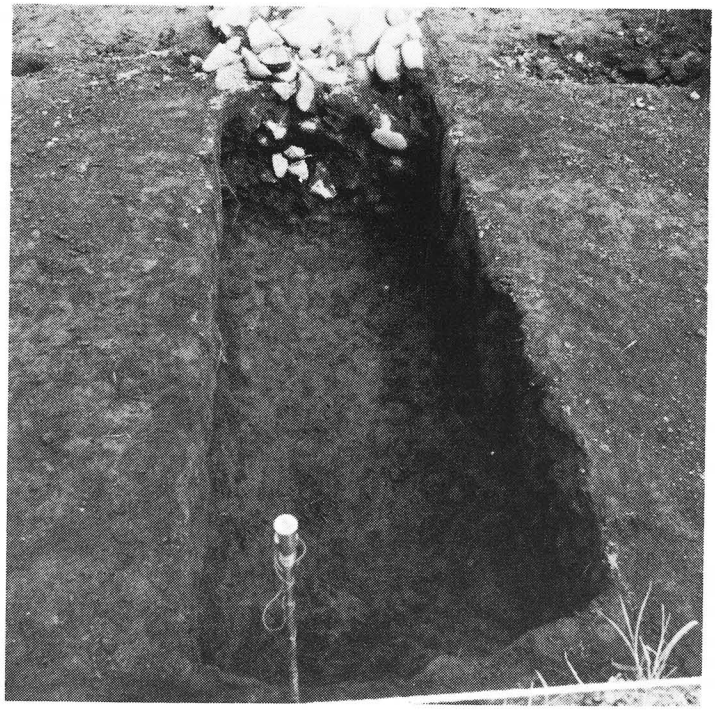
図版1



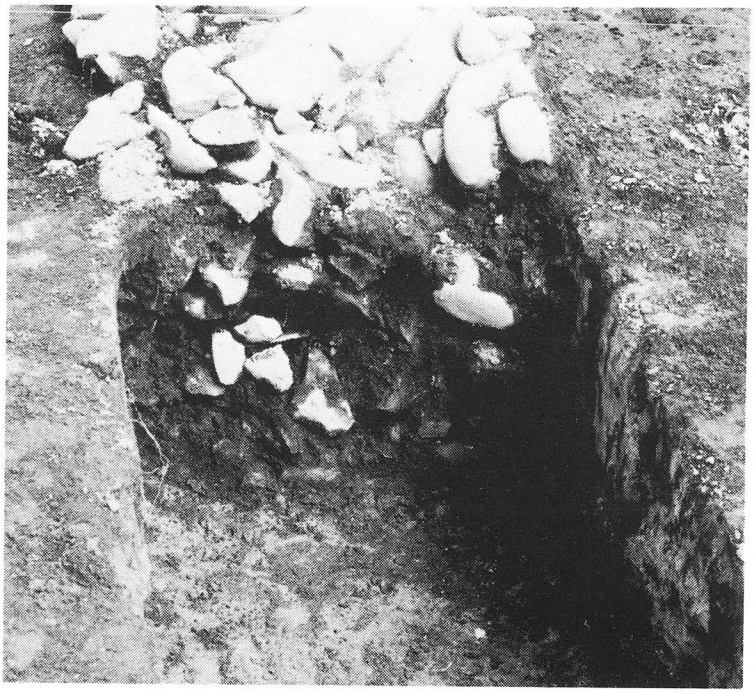
(1)　1号集石遺構（礫を取り上げた状態）

(2)　2号集石遺構全景

図版2

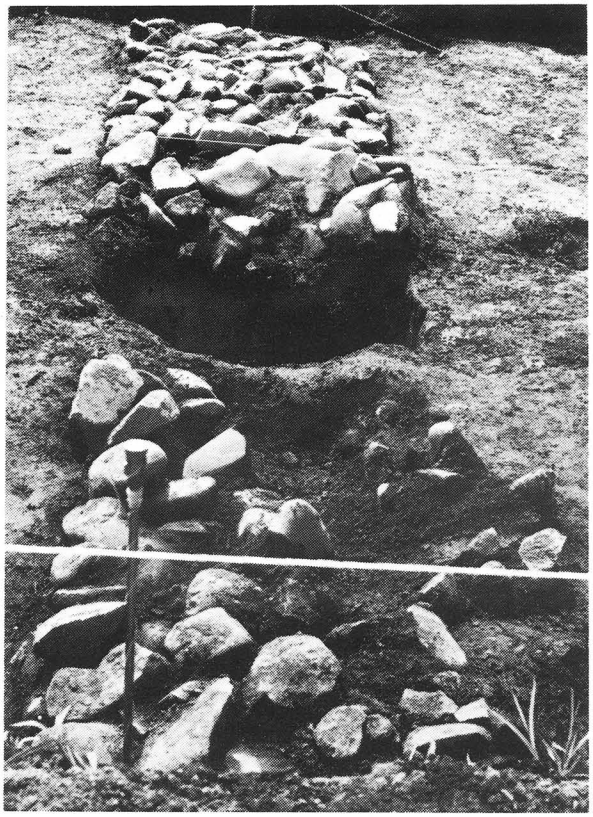


(1) 2号集石遺構（西側の礫を掘り上げた状態）

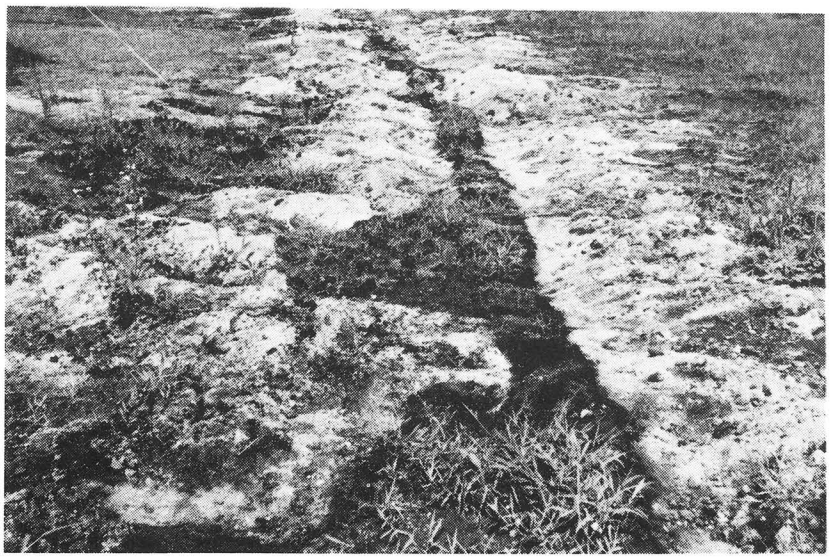


(2) 2号集石遺構（断面の状態）

図版3

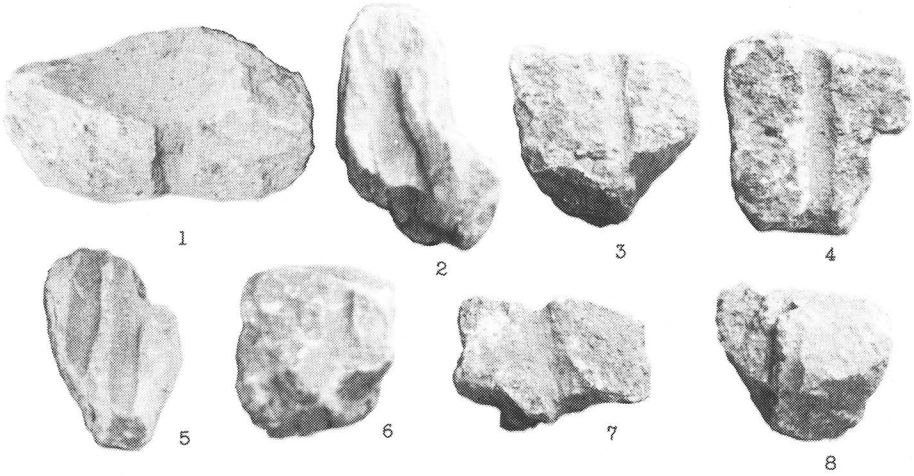


(1) 2号集石遺構（西から見る）



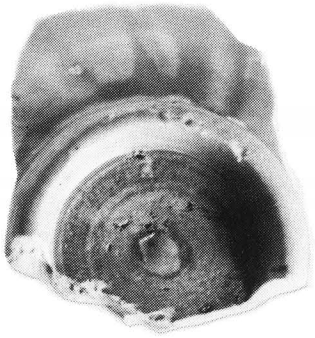
(2) 溝状遺構

図版4

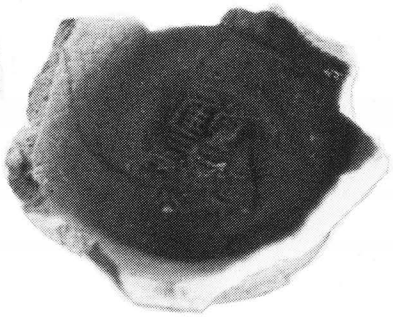


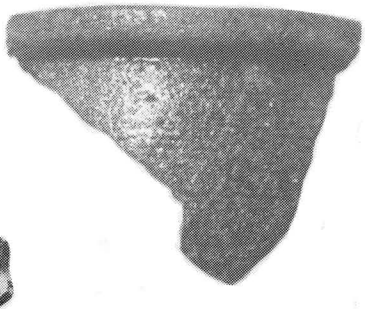
鞴の羽口及び鉄滓群

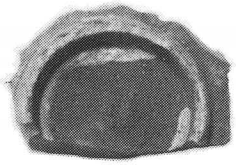
拡大

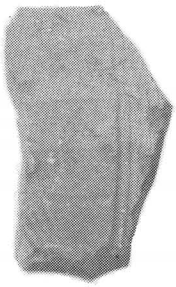


拡大









出土陶磁器片

（付）

昭和５５年度　埋蔵文化財発掘調査一覧

（昭５５.２～昭５６.１）

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
1	東平下遺跡	川南町大字川南 19,049番地	55. 2.25 ～ 2.29	県教委	日高　正晴 岩永　哲夫	直刀　1 弥生土器一括	
2	陣内遺跡	高千穂町大字三田井字車迫292－1	55. 2.25 ～ 2.29	高千穂町教委	石川恒太郎 永友　良典	縄文土器片 約 7,000 石器　67 ほか	
3	鐙遺跡	新富町2173－1	55. 3.23 ～ 3.26	新富町教委	面高　哲郎	弥生土器 約 250	
4	上の原地下式古墳群　1～9号	須木村大字中原 1,754の1	55. 5.20 ～ 5.30	県教委	岩永　哲夫 茂山　護	鉄鏃　36 刀子　10 直刀　3 ほか	本号掲載
5	上の原地下式古墳群　10号	〃	55. 6.24 ～ 6.25	〃	岩永　哲夫	剣　1 刀子　2 鉄鏃　2	〃
6	日守地下式古墳群 55－1号～55－4号	高原町大字後川内 1－118，1－302	55. 7. 7 ～ 7.12	高原町教委	岩永　哲夫 北郷　泰道	鉄鏃　11 剣　5 貝輪　15 ほか	〃
7	上沖遺跡	三股町大字樺山字上沖4,332－6	55. 7.15 ～ 7.12	県教委	石川恒太郎 岩永　哲夫 北郷　泰道	鞴の羽口　11 陶磁器片約 30	〃
8	南平横穴群 55－1号～2号	高千穂町大字押方字南平1,293	55. 7.23 ～ 7.25	高千穂町教委	北郷　泰道	轡　2 鉄鏃約 70 直刀　2 玉類約 50	〃
9	宗仙寺地下式古墳	国富町大字本庄 4,154の1	55. 8.25 ～ 8.26	国富町教委	茂山　護 面高　哲郎	直刀　1 鉄鏃　3 刀子　2 人骨　2	

番号	遺跡名	所在地	発掘調査日	調査主体	調査員	遺構・遺物	備考
10	祝吉遺跡	都城市郡元町 5,746番地	55. 9.24 ～ 10.17	都城市教委	北郷泰道	弥生土器 約2,000 石包丁 5 磨製石鏃未製品 約50 陶磁器 1 ほか	別報告
11	学園都市5号地遺跡	清武町大字木原	55.10.27 ～ 11.35	県教委	岩永哲夫 北郷泰道	縄文土器 約300 弥生土器約20 土師器約20 石器約20 鉄器約2	〃
12	土器田横穴墓	佐土原町大字下那珂土器田 12,734－6～7	55.11.17 ～ 12. 5	佐土原町教委	日高正晴	鉄器類 31 須恵器 47 土師器 33 ほか	
13	学園都市11号地遺跡	宮崎市大字熊野	55.11.18 ～ 56. 1.14	県教委	岩永哲夫 北郷泰道	縄文土器 約200 弥生土器 約100 石器 （軽石製石棒 1）	別報告
14	菓子野町地下式古墳	都城市菓子野町 9,506－11	55.12.15 ～ 12.16	都城市教委	石川恒太郎	人骨 1 軽石 8	
15	北水戸地下式古墳	西都市大字上三財字北水戸 6,612－2	55.12.17 ～ 12.19	西都市教委	日高正晴	鉄鏃 14 須恵器 4 土師器 3	
16	下の原地下式古墳	小林市大字水流迫字下の原 179－3	56. 1.29	小林市教委	岩永哲夫 北郷泰道	剣 2 鉄鏃 7 刀子 6	

宮崎県文化財調査報告書
第　23　集

発行　昭和56年3月31日
宮崎県教育委員会

編集　宮崎県教育庁文化課